雪の跡

流月楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雪の跡

【Ｎコード】
Ｎ１７１１Ｄ

【作者名】
流月楓

【あらすじ】
死を宣告された癌患者が、一ヵ月後元気に退院した。その謎をめぐって、ある闇組織が動く。ごくごく普通の生活を送る京子と、その恋人、一樹が巻き込まれ、次第に悲しい運命をたどっていく……。

プロローグ

２００５年　２月

途方もなく彷徨う視界に何かがかすった。
立ち止まり見上げると、小さなかたまりは頬に少しの刺激をもたらした。
京子はコートのポケットにしまっていた手を出す。

寒いわけ……ね。

手のひらのそれは、儚さを含みながら姿をとどめることなく消えていった。
鈍色の雲から柔らかな白が降りてくる。
どこから生まれてくるのかとめどなく、ゆっくりだけど確実にまわりを白く染めようと躍起になっているようだった。
この光景を、京子は前にどこかで見たはずだった。
思い出そうとすれば、何かが壊れそうで思考回路を閉ざす。京子は何も感じないふりをした。
失い過ぎたのだ。
あの日から、何もかも――。

◇

１９９８年　東京

耳を劈く銃声が部屋に響きわたった。男が地下に作らせた射撃場である。暗く長い部屋で、壁はしっかりと防音加工がされている。
男の視線の真っ直ぐ先には、人型をした的があった。

ごつごつした傷だらけの手で弾をこめると、それは数秒と経たないうちに全て撃ちこまれていた。一本の糸をピンとはったように空気は静まり、かと思うと微かに的の揺れる音がする。弾丸は、１つとして外れてはいなかった。
それを確認する間もなく男は弾を入れ替える。使い終わった弾がバラバラと小気味よく床に散らばった。

この家の１階では、初老を迎えた女が忙しく動いていた。
リビングにある大きなガラス窓からは夕焼けの光が挿しこみ、部屋中を覆いつくしている。
その光が届く範囲にある広いキッチンでは、薄い湯気を漂わせた鍋が規則正しい音をたてていた。
女は味を確かめようと小皿に取って口にすると、数回頷きながら火を止めた。
ふと近くの時計を見て女は首を傾けた。
男は時間に正確で、毎日決まった時刻になると地下からあがってくるからだ。それは毎日狂うことなく繰り返されていた日常だった。
胸騒ぎがした。
急いで地下に行ってみると部屋の隅で男がうずくまっていた。すぐさま駆けより数回揺り動かしてみるものの、その顔は苦痛にゆがんだまま動かなかった。
女は震えてくる手をなんとか抑え男の息があるのを確認すると、電話の受話器をはずした。

東京都立Ｓ医療センター。東京都でもかなり大きな病院だ。循環器系、外科手術に優れ、常に最新設備が導入されている。その一室に男は運ばれた。
薄白い顔をしたまま、薬の臭いが染み付いた清潔なシーツと布団にくるまれ横たわっている。男の腕には数本の細い管が繋がれてお

り、透明の液体が送り込まれていた。
先程からその痛々しい光景に不安そうな瞳が向けられている。
小さめの唇をきゅっと結んだまま女が立っていた。

「奥さまでしょうか？」
白衣を着た男が、すでに開かれていた扉をノックした。女はその問いに答えることなく、視線だけを動かす。
「少し、よろしいでしょうか？」
扉から一歩もその部屋に入ることなく、男は訊ねた。
女が頷くのを確認すると、静かに会釈をしその場を去った。
女は激しい動悸がするのを感じた。何かが後ろから襲ってきて、その何かに覆われてしまうような、どうしたらいいかわからない感じがした。やがて一度だけ深い呼吸をしてから、その部屋を出た。

この女は４０歳を過ぎている。髪はつややかで手入れがいき届いており、後ろで綺麗にひとつに束ねられていた。目尻の皺、額の皺、顔の全ての皺が他の４０代に比べて明らかに少ない。
変に疲れた様子もなく、こんな状況でなければ笑顔もさぞ美しいはずだった。年齢を感じさせない美しさがそこにはあった。

「覚悟しておいて下さい」
それは、病室を出て右に進んだ先にある部屋で告げられた。
白い壁と小さな窓があるだけの殺風景な部屋で、医師が座る椅子と机が並び、その横におそらく患者の容態を聞く為に家族が座る折畳みの椅子が無造作に置いてあった。
女はその一つの椅子に座りながら目を見開き、なにか言おうと口を動かしたが声にならなかった。
胸にビーズ刺繍のあるワンピースから真直ぐに出ている透き通った肢体は頼りなく、今にも消えてしまいそうだ。
「旦那様は、肺癌に侵されています。ステージ？とかなり深刻な状

態です」
医師は無機質な声で言った。
女は何も答えなかった。いや、答えられなかった。自分の膝の上で固く握り締めたハンカチを見つめ、放すまいと必死になっているかのようだ。
その様子を見て医師は、カルテに目を移した。
「これだけ進んでいると何か症状がみられたと思うのですが、ご主人はなにも？」
女はゆっくりと顔をあげ、空を見つめながら力なく「はい」と答えた。
医師はゆっくりと重いため息を吐き、ペンを走らせる。
「薬物治療を行い、もって3ヶ月といったところでしょうか」
その一言で女は糸を切られた操り人形のようにがくりと肩を落とし、泣き崩れた。
「お察しします」
その言葉は、嗚咽とともに室内に冷たく響いた。

1ヶ月後、東京都立S医療センターの医師がうなり声を上げながら、同じ患者の2枚のレントゲン写真を睨みつけていた。
1枚には黒い影がはっきりと映っているのに、先程撮った1枚にはどこにも黒い影がないのだ。もちろん今まででない症例だ。
この患者の担当医はこの問題をかかえきれずに医長に相談することにした。
再検査を命じられたがその結果、誤診ではないことが証明されただけだった。
この報告を受けた医長は、患者にその旨を伝えずに血液採取と最新技術の検査を受けるように進め、担当医に対しては極秘にするようにと指示を出した。
さらに血液サンプル、検査結果をある企業へと郵送させた。

プロローグ（後書き）

５年前に実際に夢で見た事柄をネタにしました。

この作品は、
プロローグ＋１～２５章＋最終章＋エピローグ
の構成になっています。

第1章　すべてのはじまり

２００１年　夏

「高科京子（たかしなきょうこ）さん」

名前を呼ばれ小さく返事をした。

白衣姿の女性に促され、長いリクライニング式の椅子に座る。体を預けて目を閉じる。静かな音楽が流れていてとても居心地がいい。看護婦たちが慌しく動いているが、そんなことは気にならなかった。

「ちょっと、チクッとしますね」

先ほど椅子を促した看護師が京子の腕に注射針をさす。

赤く鮮やかな血が勢いよく吸い込まれ細い筒状の管を満たした。

ここ献血ルームでは、ひとりひとりに専用のテレビがついていたり、マッサージ器がついていたりしてくつろげるようになっている。夏は冷房が利いていて涼めるし、冬は冷えた体を温めてくれる。ジュースも飲めるし、お菓子もあるし、ファーストフードの割引券やポテトのＳサイズのタダ券がもらえる所もある。お金のない学生の時に京子はよく利用していた。

時間があるときには、成分献血をすると決めている京子だが今日は予定があった。成分献血は普通の採血と違って、赤血球、白血球、ヘモグロビン等の血の成分を分けて抽出するため時間がかかる。

京子は２０分程度で献血を終えると、待ち合わせ場所に向かった。

外に出るとモワッとした空気が、いままでひんやりと冷たかった体にまとわりついた。今日もやたらとセミが鳴いていて、暑苦しさを強調するのに一役かっている。

京子は一瞬目の前が暗くなって足を止める。立ちくらみだった。夏にはよく起こる現象で別に今さら驚きもしない。これがひどくな

ると貧血になりどこかで休まねばならなくなるのだが、今日は別段体調も悪くなかった。まあ、体調の悪い時には献血には行かないが。
京子は中学生の時から決まって朝礼や集会で貧血を起こし倒れていたため保健室に運ばれることが多く、そして保健の先生とは仲良くなるタイプだった。社会人になってからは通勤途中で何度か倒れ、遅刻したり、気持ち悪くなったまま家に引き返すこともあった。

待ち合わせ場所に到着した。最近の流行からは少々取り残されているような喫茶店だ。入口のすぐ横が1枚ガラスの窓になっており、その窓と平行に設置されたカウンター席が、外からでも見渡せた。
京子はすかさず溜息をつく。
「やっぱりね」
別段がっかりすることもなく睨みつけるようにドアを開ければ古びた鐘の音が鳴る。
「いっらっしゃいませ」と店員の声が響き渡った。
一応、中を見渡してみるが姿はない。中央のテーブル席にカップルが1組と年配の男性が二人、カウンター席に若い女性が一人と初老の男女が一人ずつ座っているだけだった。カップルの話声と、時折年配の男の新聞をめくる音が聞こえてきた。あとは静かなもんだ。
京子が外の見えるカウンターを手で指し示すと、近づいてきた店員が「どうぞ」と笑顔で答えた。
カウンター席に設置されている高めの椅子に腰をおろすと、すかさず店員が水とメニューを置いた。
京子はそれには触れもせず「アイスコーヒー」と言ってから笑顔でメニューを返した。店員が去っていくと、子供がいじけたように足をぶらぶらさせて頬杖を付く。

京子はこの喫茶店をとても気に入っている。コーヒーが他の店とは一味違うのはもちろん、カウンター席にしかないこの椅子の高さである。木製の椅子は座り心地も良く、高さに反して安定している。

京子の１６６センチの身長に加え４センチ以上のヒールを履けば、たいていの椅子は地面に足が着く。しかし、この椅子は足が浮くのだ。

京子はその心地よさが好きだった。自分が小さな可愛い女の子になった気分がするのだ。ナイモノねだりなのだろうけど、小さな女の子に憧れる。昔の彼の中には、京子が高いヒールを履けば背を抜いてしまう人もいた。愛に背丈は関係ないというけど、自分が大女になった感じがして気になったものだ。

アイスコーヒーがきた。焦げた茶色の液体にストローを挿しながら正面にある窓をボーっと見つめた。

一体どこからあふれてくるのだろうか。どこを見ても人、人、人。朝からぐんぐん気温は上がり、かなり暑くなっているだろうコンクリートの道路。平日は車で埋め尽くされているこの道は、休日のみ歩行者に開放されている。それを当然のごとく自由に行きかうたくさんの人。流れていく人。そして散らばっていく人。よっぽど暑いのかその景色も揺らめいてさえいる。

それとは対照的で涼しく静かな店内から、京子は待ち合わせに遅刻している小島一樹（こじまかずき）を探した。

京子が一樹と出会ったのは3年前。

務めていた会社の先輩と後輩の関係だった。現在ふたりともその会社はすでに辞めてしまっていている。一樹は商社に勤める営業マンに、京子は都内でＯＬをしていた。

一樹は背が高く細身である。細い切れ長の目が特徴的で、古風的な顔立ちをしていた。一見冷たそうな雰囲気があるし、あまり話し上手な方ではないので際立って目立つことはない。どちらかというと、聞き役に徹している風があるぐらいだ。

だから最初、京子は気にも留めていなかった。あえていうなら、会社の先輩のひとりにすぎなかった。

それがとういうわけだか同じ仕事をこなすようになってから接触が増え、気がついたら好きになっていたというごくありふれた普通の恋だった。一樹と付き合うことになったのは、出会って一年近くもたった頃だった。

氷の溶けかけたアイスコーヒーをかき混ぜながら、京子は腕時計を見る。約束の時間から２０分も過ぎていた。一樹はとても時間にルーズで、待ち合わせ場所には必ずといっていいほど遅れる。それが京子から見た唯一の欠点と言えばそうなのだが、待たされるというのも苦痛だ。

「２週間ぶりなのに」

両手に顎を乗せ、誰が見るワケでもないのに不貞腐れた。

それでも京子と一樹は喧嘩をしたことが一度もない。というか喧嘩にならないのだ。一樹は京子よりも３つ年上だからなのか、言い合いになってもムキになることはなく常に穏やかな対応をする。すぐに感情的になる気の強い京子にはありがたいことではあった。

だがこうも一方的な状況では京子の不満が不安になり、怒りに変わるのはごく自然のことである。

ある日、とうとう京子がキレた。

『待つ人の気持ち考えたことある？　あるわけないわよね。一樹はさ、どうでもいいのよ私のことなんて』

一樹は暫くぽかんとしていたが、『どうでもいいってことはないけど……。ごめん』と頭を下げた。

しかし、それで数々の時間の無駄を許せるはずがない。

京子は、この遅刻魔を改めさせる方法を考えた。

といってもなんてことはない、待つ方の気持ちが分かればいいのだ。

待ち合わせは新宿駅の１番線ホーム、南側の階段付近だ。待ち合

わせの5分前には到着して、ホームが見渡せる線路を挟んだ3番線ホームで京子は待っていた。
案の定一樹はすぐには現れなかった。もっともこの時点で来られても困るのだが。
この駅は、平日でも休日でもさほど人の量など変わらない。違いといえば服装が色とりどりで、若い層が増えている程度だ。頻繁にホームに入ってくる電車からは、溢れかえる人の群れが京子を覆い隠すようにして足早に通り過ぎていく。その人の群れは止まることなく数箇所ある階段に吸い込まれていった。

また隣のホームに電車が滑り込んできた。何度この電車を見送っただろうか？　人間観察もそろそろ飽きてきた時だった。ようやくターゲットが姿を現したのだ。
この混雑の中、京子は見つかるはずもないのに咄嗟に駅の柱に隠れた。少し鼓動が早くなっている。
一樹がきょろきょろ辺りを見回しているのが見えた。とくにあわてる様子もなく携帯を取り出して数回操作したあと、耳元にあてた。
間もなく、京子が肩から提げていた薄茶色の鞄から振動音がした。もちろん京子はその電話に出ることなく、ずっと一樹を見ていた。
途切れた振動音に京子は少しだけ罪悪感を感じた。今すぐに会いに行きたくなっていた。しかし、数々の遅刻を許すこともできない。京子は痛む良心から逃げようとぶるぶると首をふった。
すでに待ち合わせの時間から４０分経っていた。
一樹は階段の横に寄りかかってじっと腕を組んでいる。
ここで負けてはならないと、京子はさらに時間が過ぎるのを待った。
その間一樹はタバコを吸いに行ったり売店でコーヒーと新聞を買い再びタバコを吸ったりして、最終的には待ち合わせ場所に戻ってくる。携帯を何度か見ていたが帰る気は全くないようだった。
動かないからか少し肌寒さを感じてきた。3月とはいえまだ風が

冷たい。こんなところで風邪をひくわけにもいかない。京子はしばしぶしぶ待ち合わせ場所に行くことにした。
階段を上って隣のホームに移動する。
結局1時間半ほどの遅刻だ。今まで京子が待った時間に比べれば、砂の粒だ。

一樹に駆け寄ると目の前で手を合わせ『ごめんね、待ったでしょ？　連絡取れなくてさ』と、反省顔をつくった。
しかし、一樹はにっこり笑ってこう言ったのだ。
『大丈夫、俺も今来たところだから』
一樹に怒った様子は全くない。嫌味を言っているわけでもなさそうだった。
1時間以上は待ったはずなのにそんなことどうでもいいかの様に、『今日はどこ行くの？　俺さ、腹減っちゃったんだけど』と悪戯っ子のように無邪気な笑顔で京子の手を握りしめた。
その手はとても冷たくて、京子を激しく落ちこませた。
馬鹿なことをしたと、もう二度とこんな事はしないと誓うと同時にこの遅刻魔を更生させるのを諦めたのだった。

すでに薄くなってしまったアイスコーヒーを京子は一口飲んだ。
朝から頑張って巻いてきたカールがとれかかっている。アイスコーヒーで口紅は落ちるし、汗でファンデーションは崩れていた。
トイレでそれらを直そうと鞄を持って立ち上がった時だった。目の前の窓越しに一樹が両手を合わせていた。京子はカバンを元に戻し座りなおす。

少し乱暴な古い鐘の音が店内にひびいた。
一樹は席を案内する店員を手で制し、真っ直ぐこちらに向かってくる。
いつもは笑顔なのだが真剣な顔つきだった。この猛暑で息を切ら

し額には薄っすら汗が吹き出ている。
「帰っちゃうの？」
京子が鞄を持って立ち上がろうとした姿を、自分の遅刻のために怒って帰ってしまうところだと勘違いしたらしい。
「まったく、２週間ぶりのデートなのに帰るわけないでしょ」
一樹は顔の前で手を合わせ、「ほんと、ごめん」と許しを乞う。京子を一瞥したら少しホッとしたのか「遅刻の言い訳じゃないんだけどさ、ちょっと聞いてよ」と、ずうずうしくも隣に腰掛けた。
注文を取りに来た店員に、すぐ出るからと手を挙げて合図を送るといつもの遅刻の言い訳が始まった。
一樹の遅刻の理由はいつも様々で、道端で老夫婦が倒れていたので病院まで連れて行ったとか、急に臍から芽が出たので切っていたとか、謎の飛行物体が頭に衝突したとか、秘密の任務を遂行していたとか、非現実的なことばかりを並べたもので、当たり前だがどれも本当のことではない。実際は単に寝坊しただけなのである。
「それで？　ふぅん。そりゃ大変だったね」と京子は抑揚のない声でつきあってやる。
「――そんなこんなで、遅れちゃったんだよね」
一気に話し終えると京子の水をゴクリと飲んでから申し訳なさそうにこっちを見る。が、京子は許すものかと、横目で睨みつける。
「うっ……ごめん」
「ほんと、反省してんの？」
「もちろん！」
「嘘っぽいんだけど」
疑いの顔を向けると一樹は視線をそらせた。
「やっぱ、帰る！」
「え？　待ってよ」
京子の顔色を伺って右往左往する一樹。ふざけた慣れ合いではあったが本気でホッとする一樹の空気が京子は好きだった。
このふたりのデートはもうすでに始まっているのだ。

◇

空から大きくふんわりとした雪が降りはじめている。京子と一樹は、電車のホームにいた。帰り道は別々なので線路を挟んだ二人の距離は遠く、ときどき手を振ったり微笑みあっているだけだ。

やがて一本の電車がゆっくりと入ってくる。京子は電車に乗り線路側の扉前まで移動する。少しはにかんだ笑顔が窓に映った。

扉が閉まり電車がホームを離れていく。一樹は景色と一緒に後ろに追いやられ、暗い窓から消えた。

田舎の最終電車なので空いていた。しかし京子はそのまま窓を見つめていた。さっきまでここに映っていた一樹に心を奪われていたからに違いなかった。

寒さで目が覚めた。

冷房がつけたままになっている。京子は顔だけを横にむけた。一樹は静かに寝息をたてている。

京子は起こさないようにゆっくりと布団からはい出ると冷房のスイッチを切った。それから狭いリビングに行き、冷蔵庫から麦茶を取り出した。

ここは京子が大学時代から借りているマンションだ。借りているといっても、学生の時は親がお金を出してくれていた。さすがに社会人になってからは、自分で払っている。１ＬＤＫと狭いが、なかなか居心地がいい。女の子らしい薄いピンクが主体の部屋は、大阪にいる母が揃えたものだった。

一樹は、こうしてたまに泊まりにやってくる。仕事が忙しいとかでなかなか会えず、泊まりで会えるのは3ヶ月ぶりだった。

時計を見ると、夜の１１時を少し回った頃だった。麦茶を飲み終

えると京子は布団にもどり、細いけどしっかり筋肉のついた一樹の腕に寄り添った。

京子はゆっくりと目を閉じ、再び夢の中へと意識をすべらせる。

まだ、付き合っていなかったふたりの気持ちが通じ合った瞬間。それはまるで、これからの未来を祝福しているかのように静かに雪が降りだしたのだ。

偶然、出張先から一緒に帰ることになった。ただし一樹は自宅へ、京子は会社が用意したホテルへ。改札から別々になり、「お疲れ様」と微笑んだ。

ホームでお互いの姿を認めると京子から軽く手を振った。恥ずかしそうに笑う一樹の顔を見て、名残惜しかったのは自分だけじゃないと確信した。

寒い夜だった。

白い息がとめどなくこぼれてる。鼻から入ってくる空気が冷たくて京子は手袋をしている分厚い手で口を覆った。白い影が目を霞め京子は上を見た。

黒い空からちらちらと雪が降り始めていた。それはホームの街灯に照らされてキラキラしている。生まれたばかりの小さな粒がひどく神聖なものに見えた。さっきから抑えても抑えてもこぼれてくる気持ちが祝福を受けているようなそんな感覚におちいった。

京子は胸を締め付けらた。切なさを含んだ顔になる。訳も分からず泣きだしそうだった。

声を発することもできなかったので、ホームから少し乗り出し空を指差す。

一樹が笑った。京子の頬に涙が伝いそして落ちた。

今でも鮮明に思い出せる京子の一番大事な記憶だった。

『ねぇ、一樹は、覚えてる？』

京子は、意識を深い眠りに委ねた。

第2章　水面下

赤月零児(あかつきれいじ)は、エレベータにイラついていた。すでに点灯している上印ボタンをカチカチと何度も押す。

一刻も早く社長の神取にすべき話があるのだ。息をきらしながら同じ敷地内にある本社ビルにやって来たのに、こんなところで足止めだ。

いつもは気にならない３０秒程度のエレベータの待ち時間が、今日に限ってやたらと長く感じる。

ポンと軽快な音を立てエレベータが静かに到着すると、まだ扉が開ききらないうちに入り込み、今度は最上階のボタンをカチカチと乱暴に押した。零児とは流れてる時間が違うとでもいうように、ゆっくりと扉が閉まっていく。

このビルは２５階建てのため設置されているのは高速エレベータなのだ。が、それでも零児には物足りないほどだった。右足を小刻みに床にたたきつけ、顔をゆがませた。

ものの1分もたたないうちに電子音が鳴る。激しい息を整え、深呼吸をする。酸素が足りないのか少し眩暈がした。

エレベータの扉がこれまたゆっくりと開くと、それを押しのけ真っ直ぐに社長室に向かう。途中、門番のように目を光らせる秘書が何か言ったが零児は聞こえない。重々しいドアをノックし、その返事も聞かず慌しく開ければ社長の神取がどっしりと大きめの椅子に座りこちらを睨んでいた。

「と、突然、申し訳ありません！」

直角に体を曲げながら、必要以上に大きな声が出る。

神取進(かみとりすすむ)。ＪＩＮＮＯ製薬の社長で、その規模は日本全国にとどまらず海外にも支店がいくつか存在する。製薬会社でも首位を争う一流企業で知られていた。

神取は大柄の太った男で５６歳になったばかりだ。先週、赤坂プリンスホテルでバースディパーティを大々的に催したばかりであった。

ＪＩＮＮＯ製薬は中小企業を食いつぶして大きく成長したことで知られており、同企業から恨みを買うこともしばしばで黒い噂は絶えなかった。真偽はともかく、自殺に追い込まれた社長も数人いるとのことだ。

しかしながら実績は世界的レベルといっても過言ではない。そのせいか神取のことは、この業界はおろか、他業界の社長すら恐れていた。

別名、鷹の目。

その名の通り、神取の鋭い眼に睨まれたら諦めるしか道はないのだ。威嚇するのに十分な眼力は、相手側に不利な取引でも成立させてしまう。神取の裏には、常に黒い影が潜んでいることを誰もが知っているからだ。

そしてその大きな力には誰も逆らおうとしなかった。

零児の後ろで、開きっぱなしのドアを叩く音がした。

「お茶をお持ちいたしました」

先程の社長秘書が零児をわざとらしく一瞥してから、ガラスと大理石でできた高価なテーブルにカップを置くと、社長に向かって一礼し静かに出ていった。

「座れ」

低くしゃがれた声に零児はようやく首を上げ、黒い皮張りのソファーに腰を下ろした。神取も大きすぎる椅子から立ち上がり、中央にあるソファーに零児と向かい合って座る。

ソファーの肘掛は、横に開くようになっている。そこから葉巻を取り出すと、シガーパンチで穴を開けダンヒルのＺＩＰＰＯで火をつけた。深く息を吸い込み白い煙を吐き出す。

零児はそれを見届けた後で大きく息を吸い込むと、ゆっくりと話

し出した。

１９９８年のことである。

東京都立Ｓ医療センターに一人の患者、橘孝雄５２歳が肺癌と診断された。かなり進んでおり、余命数ヶ月として想定されていたはずだった。

しかしながら1ヶ月後、レントゲン写真から癌細胞が1つも見つからなかったのである。医長の沢田一郎は、この不思議な現象をＪＩＮＮＯ製薬研究センターに極秘で調査を依頼してきたのだ。医長の沢田と神取は、大学の同級生で今でも交流があった。

その調査の研究担当として、Ｔ大の研究員として務めていた赤月零児が任命された。３年前、この研究の為にＪＩＮＮＯ製薬から引き抜かれたのだ。

零児の研究への取組みはＴ大でも有名だった。徹夜で研究するのはもちろん、食事をしているときも風呂に入っているときもトイレに入っているときも、零児の頭の中は常に活発に動いていた。すでに研究したものは、頭に全てインプットされており、資料は必要なかった。

1時間後、零児は社長室を後にしていた。およその流れを神取に話したものの研究資料を作る必要があった。もちろん零児の頭の中には全て入っているが、神取に説明するのに言葉だけでは不十分だった。

研究センターに戻り資料を急いで作成しなくてはならない。莫大な資料を作成するには、2年前に助手として務めている佐藤勉と手分けしても1週間はかかる。

零児は頭の中で計算しながら研究センターに足を急がせた。

神取は零児が退出した直後、電話をかけた。

「仕事の依頼だ」

それだけ告げると、電話を切った。
神取は置いてあった葉巻をゆっくり手にすると、口にくわえ吸いこむ。すぐに煙が神取の傍で漂った。
3年前に起こった癌細胞死滅の謎が解き明かされたのだ。

◇

厳しい残暑が続いていた。強い日ざしは、カーテンを通して部屋に差し込んでくる。
だが京子は思いきって部屋の窓を開けた。熱風が体を通り過ぎて冷房で冷えた部屋の中へ進入してくる。
「まだ暑いなぁ」
口をへの字に曲げいったん部屋の中に戻り、ベッドの上に敷いてある布団をベランダに持っていく。

今日は、一樹が家に遊びに来る約束だった。すっかり夏バテしてしまった京子を気遣って、部屋でのんびりすることを提案してくれたのだ。京子にしてみればその前の掃除が大変だ。
髪を1つに束ね部屋の隅から掃除機をひっぱりだした。時計は11時を指している。一樹が来るまで2時間しかなかった。早く掃除をすませ夕飯の買出しにいかないと間に合わない。
掃除機の電源を入れるとファンの音が鳴り響いた。
「一樹ったら、気づいてないわね」と独り言。
今日は一樹の誕生日だった。
腕によりをかけてご馳走を作ってあげようとメニューを頭に思い浮かべた時だった。掃除機が突然大きな音をたて何かを吸い込んだ。
掃除機の先はベッドの下だ。ゆっくり引き出すと掃除機のスイッチを切り、引き剥がす。
「あっ」
つい、顔がほころぶ。一樹と初めて撮った写真だった。

付き合い始めた冬、箱根に行ったときの写真だ。緊張しているのか中央に寄り添っている二人の笑顔は固い。その周りの風景が澄んでいて寒さを強調していた。

「懐かしいぃ～」

すぐそばの、ベッドに腰を下ろした。

一樹と遠出するとき、京子は必ずカメラを持参する。一樹と撮った思い出の写真は全てアルバムに収めている。アルバムはすでに3冊を超えていた。特にお気に入りの写真のいくつかは、写真たてに入れて部屋に飾っている。

ベッドと隣接している机の引き出しから新しい写真たてをだすと、その写真を一樹が気づいてくれるのを期待しながらテーブルの上に飾った。

２０分遅れでドアホンが鳴った。京子は急いでドアの鍵とチェーンをはずすと眠そうな顔の一樹が見えた。

「どうしたの？　疲れてるみたいだけど……。まぁ、とにかく上がって」

コクリと頷くと靴を脱いで中に入る。

一樹は淡いグリーンの二人がけのソファーに腰掛けた。このソファーは一樹からの贈り物だった。去年の誕生日に、ねだって買ってもらったものだ。

アイスコーヒーを入れ一樹の前に差し出すと隣に座った。

さっきから落ちつかない。一樹が、いつもの遅刻の言い訳をしないからだ。

一樹をじっと見つめた。隣に座っている一樹は目の前にあるアイスコーヒーにミルクを入れ、ストローでかき混ぜはじめた。カラカラと乾いた音が鳴り響く。

「どうしたの？　なんか元気ない？」

一樹のとろんとした目を覗き込む。
「えっ？　あっ、ごめんボーっとしてた」
頭を掻きながら申し訳なさそうな顔をする。
「大丈夫？」
「うん。ちょっと仕事で疲れたかな。最近残業多くてさ」
「そうなんだ」
京子もアイスコーヒーを口にした。

京子は仕事が忙しい辛さを知っている。前の会社が半端なく忙しかったのだ。出張が多く残業も多いのに、残業代は常に決められた金額しか支払われなかった。しかも出張先がとても遠い為、通うことはできなかった。ホテル生活を余儀なくされていた。
精神的にも追い詰められ、休みはひたすら休養のために費やされた。いくら不景気とはいえ3年間働いたものの、耐えられなくて辞めてしまった。
一樹もおそらく京子と同じ理由で、転職したに違いなかった。転職後は早く帰ることが多かった一樹だが、やはり忙しい時期もあるのだろう。

あたりは、すっかり暗くなっていた。
夕飯の支度を終わらせ、カーテンを閉めながらソファーで眠ってしまっていた一樹に声をかけた。
「一樹？　ご飯できたよ」
目をこすりながらゆっくりと伸びをする。大きなあくびをしながら起き上がってくると、テーブルにあるいつもとは違う豪華な夕食を見て呟いた。
「あれっ？　今日、なんかのお祝いだっけ」
「やっぱり忘れてる」
「ん？」
一樹は、きょとんとして首をひねっている。

「誕生日」
「あっ！」
目が大きく開くと、すぐに輝きだした。
「だからこんなご馳走？　俺のために？　すげー嬉しい。ありがと」
ニッコリ笑って席につくその表情はいつもの一樹だ。
だけど京子には少しの違和感が残る。
仕事でなにかトラブルでもあったのかもしれない。心配そうに何度目かの首を捻った。

一樹は「いただきます」とフォークを持ったまま、一点をじっと見つめて動かなくなった。その視線の先に京子は満足する。掃除機で吸い込んだあの箱根の写真だったからだ。
「気づいた？」
ウフフと照れたように笑ってみる。
「懐かしいな、これ」
「なんか二人とも初々しいって言うか、顔が緊張してるよね」
「緊張してるのは、京子だけだろ？」
「なによ。実際一樹の方が緊張してたでしょう？」
ふっ、と一樹が優しさ滲ませて京子を見つめる。京子はその視線で急に恥ずかしさが染みわたっていった。
「京子、照れてる？」
「照れてないよ」
くすぐったさから、笑い合った。

よっぽど疲れていたのだろう。一樹はベッドで寝息をたてていた。
一樹の寝顔を見ながら、京子は今日一日の様子を思い出す。
寝ているのにもかかわらず、やはり仕事で何買ったのだろうか？
と思えるぐらい疲れているように見えた。しかも前の職場もかなりの忙しさだったが、それとはまた違う疲れのように思えた。
一樹はとても無口だ。仕事のことで愚痴を言われたことがない。

同じ職場だったからよくわかる。
なかなか先に進まない仕事であるにもかかわらず、もくもくとこなしている感じだ。
その一方で京子は、パソコンに向かい独り言を唱えるぐらいに常に口が動いているタイプだ。とにかくじっとしていられない性格なのだ。
このふたり、考えたら正反対の性格のように思えた。しかしだからこそ惹かれたのかもしれない。実際、自分にない落ちついた雰囲気のある一樹が京子には魅力的に見えた。

「ん……」
一樹がうなり声を上げ、寝返りをうった。
仕事とプライベートをきっちり分けたかった京子は、必ず自分の家から出勤すると決めていた。そして、それを一樹にも求めた。
どんなに面倒でも自分の家で寝た方が安らげるはずだ。仕事場にプライベートを引きずるような関係はごめんだった。職場が一緒だった時期があっるからこそ、その思いが強い。
誕生日プレゼントを一樹の横にそっと置くと、愛用しているベル式の目覚し時計を１０時にセットする。
明日は月曜日。
あと１時間半は寝られるはずである。

第3章　消えた細胞

暦のうえではすっかり秋に入ったというのに、全く暑さがひかなかった。今日も、３０度を越える日差しが照りつけている。

都内の2車線道路の歩道で一人の男が手を上げタクシーに乗り込む。行き先を告げるとタクシーは再び走り出した。

車中は冷房が利いていて風神涼（ふうじんりょう）の汗ばんだ皮膚をあっという間に乾かしていく。タクシーの運転手は女性だった。今では別段珍しくはないが風神は初めてだった。

バックミラー越しに顔を見ると、目じりの皺が深く少し垂れ下がっていた。顔の下にはたっぷりと脂肪がついた顎が重そうにくっついている。おそらく４７、８歳といったところだろうか、と風神は目を細めた。

職業柄、年齢を当てるのは得意だった。特に女性に関しては９０パーセント以上の確率で当てることができた。化粧をしていても微かに現れるその下の皮膚の質感、皺、シミ等から年齢を割り出すのである。

風神の職業は探偵である。４ヶ月前に３０歳になったばかりで、探偵という職業を考えれば若い方だ。背は１８０センチ程あり、ほど良い筋肉がついている。外に出ることが多いためかほんのりと日焼けもしている。鼻筋が通っていてほりが深く、日本人離れした顔をしている。髪の色も明るいため、ハーフかクオーターといっても信じる人は多いだろう。

「9月になったというのに、暑いわね～」と、ドライバーが話しかけてきた。

「まったくですね」と、にっこり笑ってミラーで視線を合わせる。

ドライバーは笑顔で返されるとは思わなかったのか、意外そうな顔をした。

タクシーは住宅街に入ってしばらくすると、ゆっくりと止まった。
金を払いタクシーを降り、コンクリートの塀に囲まれた大きく四角い建物に近づく。
そこに立ちはだかる大きな門の前で風神はドアホンを押すと、すぐに女の声がし門が開いた。
門からまっすぐにある玄関先に見えたのは、とても初老を迎えたようには見えない緑子の笑顔だった。茶色の美しいシルク素材のワンピースを着ていて、白い肌がよく映えている。

初めて会ったのは5年前になるだろうか。最初に仕事の依頼を請けたのもその時だった。
なんでも大企業ソフト会社から極秘とされている企画参加者リストを調査して欲しい、という依頼だった。その極秘とされるリストは厳重に管理されており、一般社員には公開されていないものだった。ある特定のＰＣから、パスワードを入力しなくてはならなかった。しかもそのパスワードは1日おきに変わり、数人の重役たちにしか知らされないものだった。
今までこなしてきた仕事の中でも相当難しい依頼だったが、風神は引き受けた。
小さい仕事から大きな仕事まで何でもこなす。これが風神の信条だった。経験が直に実力につながるからだ。苦労は買ってでもしろ、ということだ。
その依頼を受けた時、橘の隣にいた女性が緑子だった。ほとんど癖になっていた年齢当ては、緑子の年齢を３２歳と割り出した。橘が４７歳だから、あまりに若く美しい人を奥さんにしたものだとずっと羨ましく思っていたのだ。
半年かかってようやく調査が終わり、結果を報告しようと橘家を訪れた。
報告書に同意の署名を貰うのだが橘が留守であった為、代わりに

緑子に署名をお願いしたのだ。その時にトラブルを防ぐため署名の隣に生年月日を記入するようになっている。
風神は、そこで初めて緑子が４０歳だということを知った。
どう見ても３０代にしか見えない緑子は、肌がとてもきめ細やかで白かった。光の入りぐらいによっては病的にさえ見える。その肌にクリッとしたかわいい目と、高めの鼻、小さな口がバランスよくのかっていて、とても整った顔をしていた。

この依頼が思いのほか上手くいったこともあってか、橘家との付き合いは現在も続いている。
橘からの報酬は他のどの依頼よりも群を抜いていた。もちろん危険が伴う仕事が多いのも事実だが、嫌いではなかった。
今請けている依頼はこれまでで一番でかい仕事だ。
依頼期間は未定。未定というのは、橘が納得するまでという意味だ。
今日は、その依頼を受けてから初めて結果報告を持ってきたのだ。

「ご無沙汰しております。調査のご報告に来たのですが、橘氏はおられますか？」
「ええ」
緑子は風神を家へと招き入れる。
「もうすぐ来ると思いますので、あちらの部屋でお掛けになってお待ちくださいね」
「わかりました」
緑子が玄関から近い手前の部屋を指し示すと、風神は部屋に入っていった。

この部屋はいつも風神が通される部屋だった。依頼内容を聞く時、調査報告する時に使われていた。部屋は１２畳程あり、見た目はわからないようになっているが防音加工がされている。その壁に沿っ

て、飾り棚がいくつか並んでいる。棚には、高価な置時計や彫刻物がたくさん並んでいた。
風神は部屋の中央にあるイタリア製のソファーに腰掛け、橘を待った。

風神がこの仕事を引き受けたのは、もう2年前のことである。
橘は3年前、肺癌に侵され余命数ヶ月と宣告されたにもかかわらず何故か1ヶ月ほどで退院したという。その間に最新の検査を受けたが、どこにも異常はないと医師に言われたらしいのだ。不審に思わないわけはない。
そこで橘は再度病院に訪れ、その時の担当医であった内藤に話を聞いた。
最初は口ごもっていた内藤はだがおそらく嘘をつけない人柄なのだろう、橘が少し脅したところ、しどろもどろになって泣きそうな顔で話し始めた。

『このことは絶対に秘密ですからね。医長に固く口止めをされているんです。もし話したことがばれれば、私の医師生命は断たれたも同然。絶対、秘密厳守でお願いします』
内藤は何度も念をおしたあと、橘が頷くのを見てから意を決して話し始めた。
『あの日、橘さんが病院に運ばれたその日に検査をしました。橘さんは間違いなく肺癌に侵されていて、余命3ヵ月でした。これは何度も検査した結果ですので、確かです。
それからおよそ1ヶ月後レントゲンを撮りました。癌の大きさを調べるためです。それによって、投与する薬の強さなどが変わってくるので、どうしても必要なことでして、さらに薬を変更するかどうかもみていくわけですが……』
話しが脱線しそうになったので橘は咳ばらいをすると、内藤がまた話しだした。

『えっとそれで、私は目を疑いました。橘さんのレントゲン写真には何も写ってなかったのです。癌細胞が全て消えていました。肺だけじゃない、転移していた癌細胞までも消えてました。今でもほんと、信じられません。

私はこの問題をひとりで抱えきれなくなり、医長に相談しました。医長は誤診を疑われて私に再検査を命じました。しかし結果は正しく、本当に橘さんの体から癌細胞が死滅していたのです』

内藤は、そのときの状況を思い出したのか一気に話した。おそらく誰かに話したかったのだろう。その証拠にどこかスッキリした表情になっていた。

『で、その検査報告は今どこに？』

『報告書は医長に渡してしまいましたので、私にはわかりません』

医師は少し不快な顔で答える。

『よく思い出してください。医長と内藤さん、あなたしか知らない内密の話です。医長に何か渡されたり、何か頼まれたり、とにかくなにか医長からコンタクトはありませんでしたか？』

『そう言われましても、毎日忙しいのでそう覚えていないですよ』

内藤は、椅子にもたれ頭を掻いた。

『大事なことです。思い出してください。自分に何が起きたのか知っておきたい！』

先ほどより橘の口調は低く力強い。有無を言わせない声に驚いたのか、内藤はもたれていた背中をしゃんと伸ばした。

『そう、ですよね……』と黒目だけを上に向け、何かを思い出そうとしているようだ。

しばらく二人は沈黙を保ちながらも、時折内藤がうなり声を出している。橘があきらめる様子はない。

この部屋は内藤医師の一人部屋になっているらしく、本棚には医療関係の本で埋まっていた。決して、綺麗な部屋ではなかった。ひとつしかない机には乱雑に紙が散らばっているし、付箋紙がたくさ

ん貼り付いた本が何冊も重なっている。
橘は、手がかりがないかと机に視線を走らせた。
『そう言えば……』
目を見開いて内藤が長い沈黙を破った。
『あ、でも検査報告かどうかは、わかりませんけど……』
『話してください』
『医長に、これくらいの茶封筒を郵便に出してくれと頼まれました』
両手の人差し指で四角を空に描きながらいった。
『いつ？』
『郵便係の山本さんが休みだったから、えっと２５日かな』
内藤と橘は、壁に張ってある年間カレンダーに視線を移した。
その日は退院する前日だった。橘はそれが検査報告の入った封筒だと確信する。医長が何か行動を起こす時は、この病院で唯一事情を知っている内藤に依頼すると思ったのだ。
『どこ宛てに？』
鋭い目つきで橘は尋ねる。
『うろ覚えなのですが、確かＪＩＮＮＯ製薬だったと思います。うちは、よくそこの製品を使っていますので頻繁にやり取りがあります』
橘はにっこり微笑んだ。
『やっと、安心しました』
『はぁ……』
『お忙しいのにいろいろと済みませんでした。検査結果がどうなったか気になって、最近はゆっくり寝れなかったんですよ。でも、医長さんが持っているならば安心ですね……』
お騒がせしましたと、橘は立ち上がりホッとした様子で頭を下げた。
『あはは、そんなにご心配なさらなくても。別に珍しい症例だからといって人体実験とかしませんよ。映画じゃあるまいし。どうぞ今

日からは安心してお休み下さい』
苦笑しながら内藤はいった。
『はい。ありがとうございました』
微笑んだ橘の目は笑っていなかった。

その数日後、橘は風神に依頼をしたのだ。
ＪＩＮＮＯ製薬で現在メインで研究されている内容と、その経過。
この２つを調査する為、風神はＪＩＮＮＯ製薬研究センターに助手として入り込んだのである。
佐藤勉（さとうつとむ）として。
もう２年前のことだ。

「すっかりお待たせしてしまって」
橘が部屋に入ってくると風神は立ち上がった。
「依頼されていた調査の中間報告を持ってきました」
「聞かせてもらおう」
橘が力強く頷いた。

第4章　友人

ドアを開けると電話が鳴っていた。慌てて玄関に鞄を放り投げ受話器をとる。

「はい。高科です」

「あっ、もしもし夏美です。久しぶりやね！　元気にしとった？」

懐かしい声が返ってきた。声の主は高校時代の友人である小池夏美（こいけなつみ）だ。

「ほんまに夏美？　めちゃめちゃ、久しぶりやん」

京子は生まれてから高校まで両親と大阪に住んでいた。どうしても東京の大学に行きたかった京子は合格すると一人暮らしを始めたのだ。

さすがに東京に来て7年。普通に話す時は標準語だが、不思議と大阪弁でしゃべられると戻ってしまう。

「結婚するんやわ」

「えっ、ほんまに？」

友人の結婚話にテンションが上がる。

「私、来週から東京に行くねんけど、その時京子に会えればええなぁって」

「ほんまに！？　嬉しいわぁ」

夏美は一度、大阪の企業にＯＬとして就職したはずだった。しかしながら、高校からの夢だった看護婦を諦められなくて、夜間の看護学校に通っていたという。夏美が結婚する人は大阪出身のようだが、仕事で東京の本社に転勤が決まったのだそうだ。お互い東京に行くならば結婚しようということになったらしい。

料金がばかにならないという理由で京子から電話を切る。が、時計を見ると電話を切ったのは3時間も経った後のことだった。久しぶりの友人からの電話で、ついはしゃいでしまったのだ。それでもまだ話し足りないくらいだった。

会社から帰ったままの格好で冷房もつけずに話し込んでいた為、服が汗で張り付いて気持ち悪い。冷房のスイッチをつけ、すぐさまシャワーへ駆けこんだ。

ベタベタだった肌が爽快感を取り戻すと短パンとTシャツに着替える。いわゆる部屋着だ。

冷蔵庫からビールを取り出しプルトップを勢いよく開ける。一口飲むと喉が潤い生き返る心地がした。

ビールを片手に壁にかかっている時計を確認し、ほったらかしにしてあった鞄から携帯を取り出すと短縮1を押す。

しばらくすると電子音が鳴り女の声が聞こえてきた。

「お客様のおかけになった番号は、電波の届かないところにおられるか、電源が入っていないためかかりません」

もう一度、時計を見る。11時を少し回ったところだ。携帯をいったん切り再度かけてみるが、やはり同じ結果だった。

先週の一樹の様子を思い浮かべれば、たぶん仕事なのだろうと思う。

京子は携帯をベッドに放り投げた。

今度の土曜日に夏美と会う約束をした。一樹との無言の約束と重なってしまったので、早めに連絡を入れておきたかった。無言の約束とは、毎週土曜日は何も言わなくてもお互いに予定を空けておき、会うことになっているという約束だ。付き合い始めた当初から、なぜかふたりの間で確立されていた。この前は、土曜日に一樹が仕事だと言って電話をかけてきた。

「やっぱり忙しいのかなぁ」とひとりごちる。
ビールを飲み終えるとなんだか眠くなり、布団に入って目を閉じた。

◇

ＪＩＮＮＯ製薬会社の社長室では、夜中にもかかわらず声がしていた。
「大丈夫なはずだ。前回の依頼も完璧にこなしてくれたしな。まだ正式に依頼はしてない。だがヤツのことだ、準備はしているだろう。資料が１週間後に届くからまたその時。２０日の金曜日に……」
神取は受話器を置いた。

第5章　推測

橘は言葉が出なかった。

風神が持ってきた途中経過の資料を何度も読んだが、どうしてもひとつの仮説に辿り着いてしまうのだ。目の前の報告書には癌細胞が死滅した理由が詳細に書いてあった。

入院中、橘は何度も吐血した。鼻の粘膜が弱まり鼻血も止まらない。咳きこめば肺が悲鳴をあげ、関節の節々まで痛かった。体の内側から病は確実に進行し、自分の死が近いことを毎日実感した。それは、橘の想像をはるかに超える恐怖だった。

これまで、死など恐れたことはなかったはずだ。そもそも橘には、恐れる権利すらないのだから……。

出血が止まらず輸血を一度だけうけた。こんなことをしても死ぬのだから、意味のないことのように思えた。しかし、その輸血によって体の中で癌細胞が死滅するという奇跡が起こったのだ。

その変異は癌細胞を抑制、さらに癌の一部分の細胞と接合し引き離してしまうため癌が死滅するということがわかったのだ。

橘の血液中には、他の人には見られない成分が見つかった。その成分はＩ成分と仮名されている。

研究員が、橘の血液中に含まれるＩ成分を癌にさせたモルモットに投与させたが、細胞は死滅しなかった。となると、橘の血液ではなく輸血された血液に奇跡を起こす何かが含まれていることになる。つまりＩ成分は、癌細胞を死滅させた後にできるということだ。

どちらにしろ、輸血した血液があれば謎は明らかになる。

ＪＩＮＮＯ製薬会社は黒い影があることを橘も知っていた。市販されている製品がどうのという訳ではない。仕事のやり方だ。ある一部では、闇のルートと繋がっているらしい噂も聞く。内密にこと

が進んでいるとすれば、金儲けの為に奇跡を起こす血液を死に物狂いで探すに違いなかった。
輸血に使われる血液は１００パーセント、人の善意によっての献血でまかなわれている。ＪＩＮＮＯ製薬は、その善意ある人を金の餌食にしようというのだ。
橘は、自分を死から救ってくれた血液提供者が危険にさらされるのを見逃すことはできなかった。一般人であろうその人は何も知らないのだ。誰にしろ橘にとって感謝すべき人には違いない。その人の人生に害を与えるような行為をどうしても許せなかった。

幸い、輸血した人の名前は伏せられていて誰かと特定するのは難しいだろう。最近、特に厳しくなってきているプライバシー保護によるものだ。
運ばれた献血センターぐらいは分かるだろうが、全ての血を調べるには時間も費用もかかり不可能に近い。しかも、内密にコトを運びたいとなれば到底無理な話である。

目の前にあるドアから軽いノック音がした。
「はい」
橘が返事をすると緑子が心配そうに入ってきた。
「まだお仕事？」
冷たい緑茶と和菓子を横に置く。
「今度の件は色々と根が深そうだけど、あまり無理をしては体によくないわ」
「根は深いね……。風神の次の報告まで待つしかないんだが」
「もぅ、だからそうじゃなくって」
緑子は橘を少し睨んだあと、諦めた顔をして溜息を吐いた。
「あなたの体のことを言ってるの。私のいうことなんて、ほんといつも聞いてくださらないんだから」
「そんなことない。緑子がいればこその私だと、いつも感謝してい

るよ」
「あら、そうは見えないけど」
橘がにっこり笑いながら緑茶を飲むと、緑子は部屋を出て行った。
橘と緑子の間に子供はいない。緑子の体が弱いせいもあるが、橘の仕事に関係していた。
橘は既に５０歳を超えているにもかかわらず、世のおじさんを悩ませる中年太りとは無縁だ。白髪交じりの髪と額にある数本の皺は老いを感じさせるよりも、むしろ品よく見えた。細く鋭い目は笑うと意図的にその場を和ませる温かな雰囲気を醸し出せた。誰が見ても、気の良い優しいおじさんに見えるだろう。
しかしながら実際は、海外でフリーの傭兵をした経験を持つ殺し屋だった。東京都内の闇ルートでは必ずその名を聞くことだろう。
現在、プロの殺し屋としては引退している。
緑子と会ったのは２８歳の頃で、プロの殺し屋の駆け出しだった。橘は今まで何人もの人を手にかけていたし、何度も危険な目に遭ってきた。もちろん命を落としかけたこともある。職業としての殺し屋は甘くはない。恐ろしいほどの金が入るが、その代償として命を落とすヤツもいるのだ。一か八かの賭けごとと同じ。ただし賭けているのは金じゃなく命だ。
それでも運良く橘は生きている。
こういう職業の場合、自分さえ守ればいいというメリットから一人が基本である。というか鉄則だ。守るものなんか増えたら危険も大きくなる。そもそも大切なものなんてない方がいいのだ。
だが橘の場合、それが強みになった。
人を殺し過ぎたせいか気が狂っていたのだろう。橘は自分の死を願うようになった。仕事でミスをして死のうとしても、体が言うことをきかなかった。染みついた経験は確実に的確に仕事をこなしていく。誰かに殺してほしと思う自分と、死ねない自分に葛藤する日

々が続いていた。
そんな橘にとって生きることがどんなことよりも優先されるようになったのは、緑子と会ってからだ。生きてまた会えることだけが、橘を強くしていった。

あれは、実に不思議な出会いだった。
橘はソファーに体をあずけ、壁に飾ってある「モナリザの微笑み」のイミテーションを見ながら遠い昔の思い出に意識を集中させた。

第6章　過去

２４年前、草葉がほのかに香る季節だった。爽やかな風が橘の頬をなでた。

真夜中、多摩川の土手を体力づくりの為に走るのを日課としていた橘は今夜も時間通りにそこにいた。

この季節、昼間にはバーベキューをする若者が賑わいをみせるこの場所だが、今はただしんと静まり返っている。時折風が吹くと、黒々とした水の流れと、木々の重なりあう音が妙に調和していて心地よかった。

あと３０分ほど走ろうかと考えていたその時、突然背後に衝撃が走った。

気配はなかったはずだ。背中に緊張が走る。敵か味方か、いや、味方なんているはずもない。橘にとってこの世の全てが敵だった。

護身用に持っていた小型ナイフを手にすると、素早くふり返る。

橘は息をのんだ。そこには、知らない髪の長い女が立っていたのだ。外灯のみのわずかな光で見たその女は、幽霊のように美しかった。

しばらく経ってもその女は動こうとせず、ゆらりと立っているだけだった。

「何をしている？」

気味悪く思いながらも、この世のものと思えない白くか細い姿に目を奪われているのも事実だ。

「……」

女は答えない。こちらを見ようともしない。

聞こえないのか、それとも耳が悪いのか。

橘が再度口を開きかけたとき、「何も」と女は呟いた。

「なんだ聞こえるのか」

ふたりの間には、また無言の時間が流れる。
どうやら幽霊ではなさそうだ、と考えていると女はゆっくり空を見上げた。
「風が」
「え？」
「気持ちよく吹いているので、外を歩いていました」
女は目を細め、黒い空を見続けた。
こんな夜中に風が吹いてるからと外に出る女。変な女だと、橘は思う。
「私、明日結婚するんですよ」
静かな声に、今にも消えてしまいそうな儚い印象をうける。
女はそれだけ言い残し、橘を一瞥するとゆっくり目を閉じた。と、同時に、首を後にガクンとそらすような格好で膝から崩れ落ちる。
間一髪のところで橘が支えた。死んだように見えたが息をしているところを見ると、どうやら気を失っただけらしい。
ホッとすると、何かが手に絡みついているのに気付いた。柔らかな白いレースだ。
その女は真白なウエディングドレスを着ていたのだ。
なにか精神的な病を持っていることはすぐにわかった。声に力が無く、その目は何も見ようとしていなかったからだ。
橘は気になった。このまま放ってもおけない。それが正直な気持ちだった。物騒な世の中だ。外見にかなりの魅力をもつ若い女をこのまま放置すれば、誰かに襲われるのは目に見えている。
それが何とも嫌だった。

今思えばそう考えている時点で、すでにこの女に惚れていたのかもしれない。冷静ではなかったのだ。冷静でいられないほどこの女に興味を覚えていた。橘の常識であれば、そのまま立ち去るはずだった。

翌朝、橘のベッドで目を覚ました女は緑子と名乗った。とりあえず、そのドレスでは動きづらいだろうと、Ｔシャツと短パンを手渡した。当たり前だがこの家に女物の服などない。少々大きめだが支障はないだろう。

緑子はコクリとうなづき、洗面所で着替えをはじめた。しかし着替えた後も、そのウエディングドレスを放そうとはしなかった。

「あの……」

「ん？」

「ここにおいてくれませんか？」

「は？」

一瞬、彼女が何をいい出したのかわからなかった。

「ここにおいてください」

もう一度彼女は言い、深々と頭を下げた。

橘は、すぐにダメだと言うつもりだった。しかし、出てきた言葉は自分をも裏切るような言葉だった。

「何か理由があるのか？」

その言葉に橘自身が驚いた。心が、フワフワと浮いてる。

「帰るところがないんです。無理なお願いだとは十分承知です」

「だって、結婚式じゃなかったのか？」

「結婚は……したくてもできないんです」

彼女の瞳が、悲しく揺れた気がした。

「だって、彼はもうこの世にいないから」

日の光を借りて彼女を見ると、昨日の薄暗い中で見た彼女より何倍も美しく見えた。黒くうねりのある柔らかそうな髪が、彼女の白い肌をより引き立たせる。今まで出会った女性の中でもここまで美しい人は初めてだった。

彼女は金森緑子、２１歳。小さい頃に両親を亡くし祖父母に育て

られた。その祖父母も去年亡くなったが、婚約者がいたために経済的には不自由していなかったらしい。しかしその婚約者が先月事故で亡くなり、残り少ない貯金で今を暮らしているという。
彼女は「何でもします。お願いします」と懇願する。
橘はその切実な声を救ってやりたかった。だが、そんなことできるはずもない。できるはずもないのに迷っていた。迷う必要などないのに。

時間は、1日、2日と経っていく。今日こそは、今日こそは、と心に決めるのだが、その答えは毎日違うものだった。
最後に残った答えは緑子をそばに置きたいと思っている自分だった。
結局橘が答えを出す間に緑子はすっかり居ついてしまっていた。彼女は、橘の身の回りの世話を献身的にこなしていた。幼い頃から苦労してきたのだろう。21歳という若い年齢に反して家事全般、手馴れたものだった。

こうして二人の奇妙な生活が始まった。

緑子がきてから3年が経とうとしていた。その間、橘は家に帰らない日がしばしばあった。期間もまちまちで、長期になると1ヶ月いないこともあった。
緑子は何の仕事をしているのか一度尋ねたことがあるが、橘は答えなかった。そればかりか自分のことを一切話さない。二人の会話は挨拶か報告か、二言三言の世間話だけだった。一緒に出かけることも橘の部屋に入ることも、許されてはいなかった。
このような状態では普通の人と違うことに緑子でなくともすぐ気づくだろう。気になっていた緑子だったが、月日が経つにつれ疑問に持たなくなった。しかしそれは意識的にだ。なぜなら怖かったのだ。もし彼の秘密を知れば、自分は追い出されてしまうと思ったの

だ。
緑子は、橘と一緒にいたかった。

ある日いつものように掃除をしていると、橘の部屋に続く廊下の電気が切れていることに気づいた。いつもは橘の部屋には近づかないようにしているが、電気ぐらい変えてもいいだろうと新しい電球を持ち、椅子を下に移動させた。切れた電球を手にした時、誰もいないはずの橘の部屋から物音がした。緑子は電球を替えてから、深く考えずにドアを開けた。

部屋にはあちこちに散らばった紙が音をたてて舞っていた。窓が開いていたのだ。白いカーテンがゆらゆらと揺れている。窓を閉めてから散らばった紙を集め机の端に置いた。

ふと見ると、わずかに机の引き出しが開いている。なにか黒いものが光っているのが見えた。緑子は好奇心も手伝って、衝動的に引き出しを開けてしまった。

目に飛び込んできたのは、拳銃だった。恐る恐る手にするとずしりと重たい。

こういうライターがあるがそれにしては重たすぎる。

緑子は、まさか本物だとは思っていなかった。

よく見る映画のワンシーンを思い出し、拳銃を構えてみた。細い腕では映画のようにかっこよく拳銃は支えられない。仕方なく両手で構えてみる。引き金に指を引っ掛け、ヒロインの真似ごとのように力いっぱい壁に向かって弾いた。

聞いたこともない轟音が緑子を襲った。目の前が真白になり、耳からは全ての音が遮断された。緑子は自分がどうなってしまったのか、しばらくわからないままだった。

まず最初に、花火をした後のような臭いを鼻から感じとる。それから目と耳がゆっくり感覚を取り戻していくと、目の前の壁が視界に入る。2センチ程度の穴が開き、薄い煙が出ていた。

彼女は銃の衝撃に耐えられず、後方へ突き飛ばされていたのだ。
緑子が手の力を緩めると拳銃が床に転がった。ゆっくりと立ち上がり部屋中を見渡す。
せっかくまとめた紙の束が無残にも散らばっていた。
緑子は平静をなんとか保とうと、先ほどと同じように散らばった紙を拾い集めた。
震える手でなんとか半分回収したところで、手が止まる。見たことのある文字が飛び込んできたのだ。驚く速さで、頭が覚醒してきた。

長谷川洋

緑子の婚約者だった。

いったい橘は何者なのだろうか。押し込めていた疑問が頭をもたげてくる。
そもそも、橘は得体も知れない自分と3年も一緒に暮らしている。普通に考えればあり得ない話だ。
確かにあの時は、自分もどうかしていた。悲しいことが一度に起こりすぎて何もかもどうでもよくなっていたのも事実だ。
だが橘を悪い人ではないと確信していた。だからこそ、ここにいさせてとすがりついたのだ。
緑子は3年間一緒に生活していて、橘に安心感さへ感じていたのだ。

橘は魅力的な男だった。普段は無口で決して顔を崩さないが、緑子が何か失敗する度に優しく微笑み慰めてくれるのだ。余り笑わない人の微笑みは不思議な魅力を発揮した。
それは、婚約者のことで傷ついていた緑子の心を癒すきっかけになった。

だが、この拳銃と婚約者の名前が書かれた紙はなんだろうか。大きな疑惑が緑子の視線を1枚の紙に落とさせた。

空が美しい夕焼けを消し去り町に光が灯り始めたその頃、ようやく橘が帰宅した。いつものように鍵を開けて中に入ると家中が暗かった。

「いないのか？」

明かりが点いていない部屋に、問いかけた。

こんなことは、緑子が来てから一度もなかった。昨日までは夕飯のいい匂いがし、灯りのついた部屋で彼女の微笑が迎えてくれていたのに。

不審に思いながら自分の部屋のドアを開けると、すぐに違和感を覚えた。ドアのすぐ横にあるボタンで電気をつけ、持っていたスーツケースを置いた。

やはりどこか違う。今朝出てきた部屋と同じはずなのに違和感を拭いきれない。

鼻をひくつかせ、かすかに硝煙の臭いを感じ取った。

ひとまず部屋を出ようと踵を返すと、びくっと体が後ろにひいた。緑子が立っていたからだ。

大きく目を見開いてから緑子の姿をとらえる。どうも様子がおかしい。初めて出会ったあの日のように、目はうつろで悲しげに見えた。一、二歩下がって全体を捉える。やがて橘の目は、緑子の右手に握られた拳銃で止まった。

なぜだ？

違和感は、疑問へと変わった。

いつもより幾分明るい廊下の電球が、彼女の姿を映し出していた。

あぁ、そうか。緑子が替えたのか。

橘の頭が現実逃避をしようと、どうでもいいことを考える。
二人は見つめあったまま、いや、睨まれたまま動かない。すでに潤んでいた緑子の目から、涙が零れ落ちる。
逃げられない。逃げるべきではない。橘の勘がそう告げていた。

橘は必死で頭の中を整理する。どうして緑子が拳銃を持っているのか。どうして緑子は泣いているのか。
「なぜ？」
橘は、ようやく言葉を紡ぎ出す。
「なぜなんだ？」
橘の視点は再度、銃に向けられる。
護身用として机の引き出しに閉まって置いた小型の拳銃に違いなかった。
部屋には、依頼の資料なども置きっぱなしにしてある。殺し屋ということが分からないにしても、あまりよくない仕事だということは分かるだろう。それ以外に他の理由がみつからなかった。

ごまかすか？　いや、ごまかせることではない。

橘は思いを巡らし視線を緑子の顔に戻す。
緑子の涙はまたひと粒、頬を伝って流れ落ちた。その涙が、全ての真相を知っているように思えた。
「わからない……。私にもわからないの。だって、電球を替えただけなのに……」
緑子が独り言のように呟く。だが橘にも、わからなかった。
なぜ緑子は自分に拳銃を向けているのだろうか。

緑子は、一枚の紙きれを橘に投げつけた。だが、紙はそこまで届かず、ひらりと床に落ちた。
緑子はここに書かれた真実を知ってしまったのだ。それはあまり

にも残酷で悲しい事実だった。
電球さえ切れなければ、紙が机の上になければ、そして窓が開いていなければ、おそらく知ることはなかった。なによりも、部屋に入ることを禁じられていたその理由をもっと重くみていれば……。
緑子は自分の行動を、悔やんでも悔やみきれなかった。

涙で濡れてしまった声を抑えるように、再び口を開く。
「長谷川洋」
「ん？」
橘はパンク寸前の頭でその名前を検索するが、心当たりはない。
「だ――」
「殺したでしょ！！」
いい終わらないうちに、緑子が叫んだ。橘が聞いたことのない、大きい声だった。
緑子の鋭く光る目は、橘に注がれる。
「あなたが……　殺したのよ」
橘はさらに頭をフル回転させ記憶を手繰り寄せる。目を閉じて意識を集中させた。
いつ？　どこで？　なぜ？　だれ？
橘は、足元に落ちている紙を取ろうとはしなかった。自分で思いださなければ意味がないような気がしたからだ。
必至に記憶を探る。緑子は思い出すのを待っているかのように、沈黙を保ったまま微動だにしない。
やがて、橘が小さな記憶の欠片にたどりつく。
3年ほど前だ。確かに名前を聞いたことがあった。ある人から、依頼を受けたのだ。
自分は、長谷川洋を知っていたのだ。
だが、だったらなんだよ、という気持ちが湧き起こる。橘は仕事をこなしただけである。今まで何人もの人を殺めてきたのだ。殺したヤツの名など、覚えてなどいない。知りたくもない。

橘はさらに混乱した。少し怒りを交えながら緑子を見据える。
「思い出した？」
緑子の深く悲しい声に、嫌な予感がした。橘の頭の中で何かがカチリと音をたててハマった。聞いてはいけない気がする。
しかし、緑子は静かに口を開きその予感を的中させた。
「そう。私の婚約者」

ゴクリゴクリと、ゆっくり、深く、絶望感が二人を飲み込んでいく。
ようやく緑子が、自分に拳銃を向けている理由がわかった。復讐というわけだ。
頭が真白になっていく。何も考えられなくなっていた。
「洋はね。洋は、たった一人、私の家族になる人だった。とても優しい人で、穏やかに笑う人だった」
緑子は溢れる感情を抑えきれないようだった。
「やめろ！」
橘は耳をふさぐ。殺した人のことなんて聞きたいわけがない。
今まで仕事だと割り切って、依頼を確実にこなしてきた。麻痺していたのかもしれない。人を殺すことに、なんの感情も湧かないのだから。何の疑問も持たなかったし、残された人の気持ちも考えたことなどなかった。橘にとっては、ただの仕事でしかなかった。
「私から洋を奪ったのがまさか、あなただったなんて！　洋との未来をあなたが……あなたが全部奪ったのよ！！」
緑子の綺麗な顔が、くしゃっと潰れる。
「どうしてよ、どうして、あなたなの！」
緑子が叫んだ。
「私も殺すの？」
「え？」
橘は耳を疑った。
「秘密を知った、私も殺すんでしょ？」

「なにをいっ……」
カチャと聞きなれた音がする。
緑子が、両手で拳銃を構えていた。

これは罰なのだ。抵抗することもできないし、してはいけない。
いつだって大人しかった緑子がこんなにも激しい怒りに身をまかせ、小さな肩を震わせているのだ。
罰ならば、受け入れるしかない。自分がやってきたことを思えば、緑子に殺されるのも運命なのかもしれない。
橘は、その場からピクリとも動かなくなった。そして目から光がふっと消えた。

それを緑子は見逃さなかった。
その目を見たことがある。死を覚悟している目だ。
以前、鏡の前で何度もその目を見た。
なにもかも失い、とても一人で歩いていく自信がなかった。死んでもよかった。

洋が残してくれた狭い部屋。ハンガーに掛かっている純白のドレス。高いからいいと断ったのに、それでも洋が買ってくれたものだ。一度も着ることができなかったウエディングドレスをせめて最期に着ようと思った。
橘と出会ったあの夜、命を絶つつもりだったのだ。
しかし緑子は再び目が覚める。
生きている。生きようとしている。そう思えたのは、橘がそばにいたからに違いないのだ。

拳銃を持つ手が、震える。引き金に指をかけているのに、どうしても力が入らない。ゆらりと立っている橘が滲んで見えなくなる。
緑子は今にも倒れそうな体で、自分に問いかけた。

本当に殺せるのだろうか。婚約者を殺した男を。自分を包み込むように優しく笑った橘を。
拳銃を向ける緑子と命が絶たれることをただ待つ橘。光を失ったその目からは、うすい涙がこぼれていた。

緑子は、橘との3年間を思い出してみる。会話もしない毎日に、残るようなものは何もなかった。だからこそ、よけいに強調されるものもある。橘の笑顔はもはや脳裏に焼きついていて、離れてはくれない。それだけで答えは出ているようなものだった。
緑子は固く目をつむり、心の中にいる洋に語りかける。

洋、ごめん。あの人を殺すことなんてできない。許して。ごめん。ごめんなさい……。

緑子は拳銃を持ったまま泣き崩れた。

復讐するには、時間が経ちすぎていたのかもしれない。
緑子が思っていたよりも、自分の中で橘の存在は大きくなっていた。愛してしまっていた。なにもかも、遅すぎたのだ。
橘は静かに近寄ると、身体が引き込まれた。緑子が橘の腕をひっぱり、すがりついたからだ。あいてるもう片方の腕が小さな肩に寄りそうと、緑子は嗚咽を漏らしながら何時間も泣き続けた。

そして今。
モナリザが壁にあいた穴を２４年もの間、微笑みながら塞いでいる――。

第7章　再会と疑惑

駅構内には、ねっとりとした空気が立ち込めていた。
京子は駅の時計を確認する。約束した時間より少し早い。
夏美と待ち合わせしたＹ駅改札を出て、辺りを見渡した。土曜日ということもあり人通りは激しい。どうやら、夏美はまだ来ていないようだ。改札横の壁にもたれかかり再会を待った。
５分もすると夏美が現れた。高校卒業以来会ってないが、笑うとできる右笑窪と柔らかな雰囲気は変わっていなかった。
時を感じさせない会話を楽しみながら外に出る。
７時にしてはまだ空はうっすら明るい。二人はしゃべりながら、最近テレビで紹介されたＢＡＲに入った。
京子がここの店に入るのは初めてだったが、テレビを見てからずっと足を運びたいと思っていた。テレビで見たよりも薄暗くあまり広くはなかったが、落ちついた雰囲気が漂っていた。店の奥には二人で座れるテーブルと４人がけのテーブルがあり、カウンターの席が１０席ほどあった。
開店して間もないのか客は少なく、テーブルに２組のカップルとカウンターで飲んでいる男が３人だけだった。大人ぽい音色のＪＡＺＺが流れていて、京子は一目で気に入った。

カウンターに案内され、とりあえず注文すると夏美がキョロキョロしだした。
「雰囲気の洒落た店やね」
「ええやろ？　私も初めてなんやけど」
店員が、ナッツとチーズ、ドライマティーニとカンパリソーダを置いていく。店員が去ってから二人は微笑み合いグラスを合わせた。
「かんぱぁ～い！」
ほとんど家でビールばかりの京子は、久しぶりのカクテルを喉に

味あわせた。すぐにさっぱりとした感触が、身体全体に広がった。
「ずっと気になってた店やってん。だから、これて嬉しいわ～」
京子はカクテルを傾け、眺めた。きれいな色だ。
「へぇー、なんで行かなかったん？　仕事忙しぃんか？」
「仕事はぜーんぜん。転職してからだいぶ楽になってんけど、ＢＡＲに女一人でなかなか来れへんやろ？」
京子は声のトーンを落とし、つまみのアーモンドを口に入れた。
「彼氏おらんの？　彼氏と来たらええやんか」
「それはあかんわ」
目の前で、手をひらひらさせた。
「彼氏、よう飲まれへん。二人で飲みに行くなんて滅多にないし、飲んでもすぐ寝てしまうしなぁ」
「かわいい人やん」夏美が笑った。
「で、今、彼氏とはどうなん？　順調？」
「どうもこうも、さっぱりや。最近忙しいらしくてな？　あんまり会ってへんねん」
「そうなんや。それは、寂しいな」
「う～～～ん、少しな」
京子が、親指と人差し指をくっつけそうにしながら少し照れたふうに笑う。その顔を見た夏美が、いたずらっぽい目をした。
「なぁ～んや！　ラブラブやんか。京子にそんな顔させる彼氏におうてみたいわ」
「あはは、今度な～」
京子は、この前買った新品のハンドバッグからタバコを取り出し火をつけた。
「なぁ？　それより婚約者について教えて欲しいわ。どんな人なん？」
今度は夏美の番だ。京子はがニヤつきながら気になっていたことを聞くと、夏美は笑うのを止めた。
この前の電話では、詳しく話さなかった。大阪出身で、東京に転

勤になったとしか聞いていない。
「ん……そのことやねんけど。実は、京子も知ってる人やねん」
その言葉に京子が吸ったばかりの煙を勢いよく吐き出した。
「うそ？　ほんま！　誰やろ」
高校時代の男子を思い出そうと記憶を手繰り寄せるが、その暇もなく夏美はあっさりと名前を口にした。
「相原崇志」
夏美は、そう言ったのだ。

相原崇志。京子が高校3年から卒業まで付き合っていた同級生だった。
京子の大学合格で遠距離恋愛になり、別れてしまったのだ。お互い嫌いで別れた訳ではなった。
その証拠に東京に来てからずいぶん長い間、崇志を忘れられずにいたのだ。
大学で付き合った男は何人かいたが、その間も京子は崇志のことがずっと気になっていた。そんな京子の東京に来てからの恋愛は、長く続かなかった。

「いや、ビックリしたわ」
京子が動揺を隠そうと笑った。すでに、2杯目のドライマティーニを飲み干そうとしている。
夏美はブルーハワイアンを、京子はスプモーニを注文する。
「いつから？　いつから付きおうてんの？」
「大学入ってすぐかな。だからほんまに崇志とはつきあい長いねん。もう、7年になるかな。まぁ、その間に色々あったけど、ようやくゴールインやわ！」
夏美は、女の京子から見てもとても綺麗な瞳で笑った。
「そうなんや」

京子は一樹とつきあってから崇志を思い出すことはなくなった。しかし、今日こんな形で夏美から崇志の話を聞こうとは思ってはいなかったはずだ。

別れた男なのだから関係ないと思っても、正直複雑だった。それでも幸せそうな夏美を見て、二人を祝福するべきだとそう思った。それが京子の正直な気持ちだった。

「うん。おめでとう！」

納得したように頷いてから夏美の方を見る。それを確認した夏美は、顔を両手で覆った。

「ごめん。なんだかホッとしたみたいやわ。京子に何て言おうかずっと悩んでてん。ほら京子、崇志と付きおうてた時あったやんか」

「まぁでも、もう昔のことやし……」

「おめでとうって言ってくれて、ほんまに嬉しい」

「あたりまえやん！　そんなん」

「ありがとうな、京子……」

「幸せになるんやで。ならんと承知せえへんからな！」

「おおきに」

どちらかともなく柔らかい笑顔が、こぼれおちた。

そして再び注文した綺麗なピンクのカクテルで、乾杯した。

京子が夏美と別れたのは、１０時半ぐらいだった。

久しぶりに楽しくお酒を飲めたからか、飲み過ぎてしまったみたいだ。気をぬくとふらついてしまう。

京子は電車の扉によっかかった。

ボーっとした頭で、夏美の薬指にはめられていたダイヤの指輪を思い出す。

同い年の友人の結婚がうらやましく思う。自分だって結婚を考えていないわけではない。まだまだ結婚に夢も憧れもある。いつか、一樹と……、と考えるのもごくごく自然なことだ。

しかし、一樹はそのことに関しては何も言わなかった。ほのめか

しもない。だからといって、京子から言う気にはなれなかった。焦ってると思われたくなかったし、やはりこういうことは男から言われたいのが女心というものだ。

一樹への想いを乗せながら電車はいくつかの駅を通り過ぎていく。指輪が欲しいと思う。結婚とかじゃなくても、一樹から貰いたい。今度の誕生日に、ねだってみようか……。酔った勢いで、京子の妄想はどんどん膨らみ続ける。

結婚したら会えない日なんてなくなるんだろう。だからといって馴れ合いにはなりたくない。いつまでも新鮮なままでいたい。記念日もたくさん作らなきゃいけないな。

京子の妄想が結婚した先までに及ぶころ、降りる駅に到着した。

電車を降りてすぐに、喉がひどく乾いていることに気づいた。飲み物を買おうと駅近くのコンビニへ入る。ペットボトルのお茶を買ってでると、道路を挟んだ目の前に黒い車からでてくる長身の男が見えた。こんな場所に、いかにも高級そうな車っていうのも珍しいが、他に聞こえる音もないので京子の視線は釘付けになる。

長身の男は開いている後部ドアに顔を近づけ、中にいる誰かとなにやら話しているようだった。

京子は首を傾げる。背格好も後ろ姿も、なぜだか一樹に似ているとそう思ったからだ。

しばらくすると、長身の男は車のドアを閉めた。車が動き出し暗い道を走って行く。見送るように、長身の男がこちらを振り返った。

京子は眼を見開いた。まぎれもなくその姿は一樹だ。

こんな場所にいるわけがなかった。

夏美と会う約束で一樹とは会えないと、京子は電話で告げたはずなのだ。『楽しんでおいで』とそう答えてくれたはずだ。京子の酔いが、急速に醒めていく。

黒いスーツを着こなし、昼でもないのにサングラスをかけている。漂う雰囲気も全然違うのに、その男はまぎれもなく一樹だった。

京子は固まり動けずに、視線は外せないままでいた。
男はサングラスをはずすと近くにあるマンションに入って行った。
一樹のマンションはここではない。当然、京子は一樹のマンションを知っている。ここからはかなり遠い場所だ。
京子はバッグから携帯を取り出し、電話をかけた。
数秒後、いつもの一樹の声が聞こえた。
「もしもし。京子？　どうし――」
「今どこにいるの？」
一樹の言葉をさえぎった。
「えっ？　家にいるよ。テレビ見てた。そっちは、今帰り？」
おっとりした声が、返ってくる。

嘘をついている。でなければ、あの男は誰なのだ。
双子だったとか？　いや、それはあり得ない。一樹に兄弟はいなかった。あれは一樹だ。
見間違うはずなかった。京子は2年もの間ずっとその姿を見てきたのだ。どうでもいい男ではなく、好きな男なのだ。

「どこの家にいるの？」
「何いってんの？　自分の家にいるに決まってるじゃん」
一樹は笑った。

なぜ、嘘をつくのだろう。京子は不安になった。浮気しているかもしれないと、強い疑惑にかられた。
最近、電話をしても繋がらないことが多かった。一樹は仕事だと言っているが、それも本当かわからない。
もやもやした気持ちから、京子は思いきって口を開いた。
「知らないマンションに入って行く、一樹を見かけたんだけど」
しばらく間があいた。息をのむ音が聞こえてきそうだ。
京子の頭の中はそれだけで浮気の不安がつのる。何かに押しつぶ

されそうだった。
「あれ、ばれちゃった？」
あっけらかんとした声が、耳に響く。
「実はさ、内緒で京子に会いに行こうと思ってたんだけど、何時頃帰るのか聞かなかったからさ。京子が帰るまで会社の先輩のマンションに上がらせてもらおうと思ってたところ。一息ついたら、京子に電話しようと思ってたんだけど……」
「うそ！」
「うそじゃないよ。あっ！　何か疑ってる？　ホントなんだけどな」
「ほんと……なの？」
「ほんとだよ。先輩のマンションがまさか京子の住んでいる近くにあるなんて、俺だってつい最近知ったんだからさ。って、やっぱり俺疑われてるの？」
電話からは聞きなれた一樹の声。優しい声。大好きな声だった。
しかし車から出てきたときの雰囲気を、京子は今まで感じたことがなかった。今まで一度も。
「じゃあ、あれは誰の車？」
「見てたの？　いや、参ったなぁ……」
「ほら、怪しいじゃん」
「怪しいって……。うん、あれはさぁ。急に仕事が入ったんだよ。取引先の社長と食事してただけなんだけど、へんなとこ見られちゃったな」
「仕事って、だって、雰囲気がなんか違ってて。それにサングラスしてた！　取引先の人に会うのに、おかしいじゃない」
「もぅ。ほんとに疑ってるんだね。あれは、うん……取引商品なんだよ。そこの社長が、新しくサングラスを販売するっていうのでくれたんだ。サングラスなんてガラじゃないけど、しかたないだろ。車の中じゃずっとかけてたよ。気に入ったふりしなきゃなんないしね。変だろう？　変わってんだよ。あの社長」
はぁ、一樹がため息をつく。とても演技をしているようには思え

ない。ほんとに嫌がっているように思えたからか、京子は少し軽い気持ちになっていた。
「ほんとにほんと？」
「ほんとだよ。って言うか見てたんだ。サングラス姿、マジで京子にだけは見せたくなかったのに」
「なんで？」
「似合わないから」
「そうかな？」
京子は、一樹が言うほど似合っていないわけじゃなかったけどなぁと首を傾げる。
「似合ってたけど。ちょっと違う人みたいでかっこよかったし……」
「まじかよ！！」
「うん」
驚く一樹の声がなんだかいつもの調子で、京子はホッとする。
「京子」
「なに？」
「俺のこと、信用してよ」
「うん」
「これから、京子に会いに行くし」
さっきよりも声のトーンを低くして一樹が言った。
「うん。分かった。しかたないから、待っててあげる」
「おう」
いつもの返事を聞いて、電話を切った。
京子は笑っていた。

第8章　捜査

風神涼は、とても疲れていた。
橘家で2回目の依頼報告を済ませ、タクシーで自宅に帰る途中だった。もう夜中だ。すれ違う車もほとんどいない。
風神は昨日から寝ていないことを思い出しながも、報告内容について考えていた。
タクシーは風神の自宅までまだ相当走り続けるだろう。考える時間はたっぷりあった。

先週の水曜日早朝、風神は清掃員の格好でＪＩＮＮＯ製薬本社にいた。胸ポケットには顔写真つきの証明書がぶら下がっている。もちろん偽物だ。
ＪＩＮＮＯ製薬では、毎週水曜日に契約している清掃会社が入ることになっていた。風神はその清掃員として潜り込んだのだ。１階の裏扉から侵入し、清掃道具一式を持って社長室に向かった。
なにを企んでいるのか調べる必要があったのだ。おそらく、零児が作成している研究資料が届いたらすぐ神取は動くはずだった。
誰もいない、最上階に到達する。
エレベータを下りると、左正面の窓ガラスからＪＩＮＮＯ製薬の敷地が見渡せた。
この最上階には、社長室と秘書室の二部屋しかなかった。エレベーター右通路奥に、社長室はある。その手前に焦げ茶色の机と椅子が置いてあり、訪問客を受け付ける秘書が座れるようになっている。
社長室の横に位置するドアには、Ｓｅｃｒｅｔａｒｉａｔと書かれていた。風神は、中に入るとそっとドアの鍵を閉めた。
真ん中にいくつかのデスクが１つの塊になっている。その上にノート型パソコンがそれぞれに置かれていた。
社長のスケジュール管理は、秘書がしているはずだ。

風神はすぐにノートパソコンの電源をいれ、慣れた手つきでキーを叩く。スケジュールを見るためにはパスワードがいくつも必要だったが、風神は5分としないでアクセスした。

思った通りだ。

研究資料が届く２０日の金曜日、神取は動きだす予定でいた。Ａホテルのスイートルームが予約されている。予約したのは、おそらく何も知らない秘書だ。時間はＰＭ８時。風神はそこで何か重大な情報が得られると確信した。

ＪＩＮＮＯ製薬を後にすると、すぐにＡホテルへ電話して今週の木曜日と金曜日の二日間部屋を予約した。ＪＩＮＮＯ製薬で何が行われようとしているのか大体の予想はついていた。だが、予想だけでは報告は書けない。あくまで事実を突き止めるのが風神の仕事である。

その日、風神はＡホテルの一室にいた。神取が予約したスイートルームにはすでに盗聴器がしかけてある。

盗聴器をしかけたのは、風神の知り合いである坂田だった。前日、神取が予約した部屋に宿泊をし、仕掛けておいてくれたのだ。

坂田も探偵で、特に盗撮、盗聴に関する仕事が得意だった。お互い一人で仕事をしているが、今回のように特殊な器具を使用する場合は坂田に頼んでいた。逆にＰＣ関係を得意とする風神が、坂田から依頼されることもしばしばある。坂田の腕が確かなことは、すでに経験から知っていた。

夜８時になった。風神は、大きなヘッドホンを片耳にあててみる。話し声は聞こえない。まだ、到着していないのだろうか。

ベッドの横の机に黒く四角い器具が置いてある。ヘッドホンは、そこにつながっていた。

この四角い器具は、隣の部屋に仕掛けてある小型盗聴マイクから信号を受信し、電波を音声に変え、ヘッドホンを通じて風神の耳に

届ける。かなり細かい音まで拾えるようだ。空調の音まで聞こえる。
１５分を過ぎた頃、ドアをあける音がした。
ホテルのボーイの声と、神取らしき低い声、風神がよく知っている零児の声、あともう１人、男の声が聞こえてきた。と、同時に風神は録音テープを回し始め、イスに座るとペンを持った。
やがてボーイが去り、ドアが閉まる。

部屋では、お決まりの挨拶が交わされている。
風神は声を元に関係図を書きしだした。
男が３人。神取と零児と、東京都立Ｓ医療センターの医長、沢田一郎だ。
零児が研究結果を話し出した。

零児が部屋を出て行ったのは一時間ほどたってからだ。どうやら零児は、研究以外でＪＩＮＮＯ製薬には関わっていないようだ。風神は紙に書かれた「零児」の文字に×印を書いた。
部屋に残された二人の声がヘッドホンから聞こえてくる。
『あの研究員が言うように、突然変異を起こす血液があるとすれば、あの時、患者に輸血した血液以外に考えられない』
医長である沢田だ。
『血液提供者の名前はわかるのか？』
『いや。名前まではわからない。が、提供された献血センターは調べてある』
『どこだ？』
『Ｙ市Ｍ区にある献血センターだ。しかし、それだけではどうにも探せない。なにしろ献血をする何百万人の人が、どの献血センターに行くか想像もつかないからな』
しばらく沈黙がつづいたが、ようやく神取が唸りながら重い口を開いた。
『確かではないが、人間の習性から考えると献血は定期的に、しか

も一度行ったことのある場所へ行く人が多いというデータがある。M区にある献血センターに信用できる者を派遣させろ。そこで採取される全ての血液と身元をうちの研究センターに送れ。赤月に調べさせる。地道な作業だが、それが最も確率が高く正確な方法だろう？』

『んー、まぁ、そうかもな。莫大な金のためだ。多少の苦労はやむをえないだろうな』

どうやら二人は血液提供者を探そうとしているらしい。

風神は、せっかくの高級ホテルにいるというのにペンを走らせ続けている。重要な情報が次々と出てくるのだ。注意深く耳を澄ませていないと聞き漏らしそうだった。

橘からは急いで報告書を提出してくれと要求されていた。明日までに報告しなくてはならない。時間からいって再度録音テープを聞いている暇はないだろう。

気持ちよさそうな綺麗にメイキングされたベッドを睨みつけながら、風神はヘッドホンの音量を上げた。

『その血液提供者がわかったとして、どうやって連れてくるんだ？』

沢田が言った。

『連れてくる必要などないだろ？　血液さえあればいいのだ』

『というと？』

『その血液から突然変異を起こさせる成分を抽出し、それを増やすことに成功したら……』

沢田のごくりとつばを飲み込む音が聞こえた。

『もっと言うなら、血液はＪＩＮＮＯ製薬だけが持っていればいい』

『つまり……殺す……と？』

沢田が確認すると、神取が不気味に笑った気がした。

『おいおい、そんな顔をするな。失敗は、万に一つもない。その道の筋に頼んである。お前の手は汚させないから安心しろ』

『そうか……。それならいいが……』
『考えてみろ。我がＪＩＮＮＯ製薬に癌治療の特効薬が手に入るのだ。癌患者は、喉から手が出るほど欲しがるだろう』
『莫大な金、か……』
ヘッドホンから、下品な声が響いた。

風神は、驚きを隠せなかった。金儲けのために血液提供者を探すだろうということは想像がついていたが、まさか殺しまでやるとは。
神取は恐ろしい男だ。金のために人を殺すことをなんとも思っていない。
血液が手に入れば、引き続き零児が研究を担当することになるだろう。そして研究が終われば秘密が漏れることを恐れ、零児、いや、関わった研究者全員を抹殺するに違いなかった。
となると、潜り込んでいる風神も消されることになる。
どうにかして神取たちよりも先に血液提供者を探し出さなくては、自分の身が危険だ。しかしながら、医療関係に幅広いコネを持つ沢田よりも早く見つけられるのだろうか。
冷房が利いている部屋にもかかわらず風神の全身からは、汗が噴き出していた。

第9章　携帯電話

夜に少し寒さを感じるほどに、秋は訪れていた。
京子は布団を干そうとベランダに出た。
空が高く、秋晴れと言うのにふさわしい陽気だ。心地よい風が京子の頬を撫でた。せわしく鳴いていたセミも、もういない。
京子は、秋から冬にかけての季節が好きだった。夏バテ気味の体調も良くなってきているし、なにより秋は景色が一番綺麗だ。
そのあと、冬がやってくる。京子はあの雪の景色を思い出すと、とても幸せだった。
京子にとって冬は特別な季節だ。一樹を好きになりはじめ、お互いの気持ちが通い合い、楽しさと、不安と、幸せの中にいた。
今年で2年が経つが、京子はあの時の気持ちを一度も忘れたことはなかった。

背後に突如、聞きなれない電子音が聞こえてきてビクッとなる。
京子は部屋の中に戻り耳でその音をたどってみると、ベッドの横で携帯が鳴っていた。おそらく、一樹が昨日部屋に来たときに落としたのだろう。
電子音は、まだ鳴っている。小さな液晶ディスプレイに、非通知と出ている。少し迷ったあと、京子は電話に出た。
「もしも――」
携帯の主でないこと、折り返し電話するように連絡できると言おうとしたのだが即座に切れてしまった。

誰だろうか……。
京子は深く考えるのをやめた。一樹への疑惑が、頭をもたげてきそうだったからだ。
先月、駅前で見た光景で浮気を疑ったが、一樹は否定した。すべ

て納得できたわけではなかったが、信用することに決めた。疑うことはとても辛かったし、一樹の態度はいつもと変わらなかったからだ。

京子はふと、明日も仕事だと一樹がぼやいていたとことを思い出した。携帯がなくて困ってるかもしれない。そう思うといてもたってもいられなくなった。

お気に入りの白のニットと、茶色が主体の幾何学模様のスカート、ヒールの低いショートブーツを履き、薄く化粧もした。

携帯を届けるほんの僅かな時間とはいえ、気を抜けない。好きな人の前では、いつだって綺麗な格好でいたかった。

一時間半後、S駅に着いた。一樹の会社がある駅だ。

聞いてはいたが、実際に行くのは初めてだった。京子は改札を下りてすぐ、目の前にある大きな地図看板を見た。前に貰った名刺の住所を探した。駅に近く、歩いて5分ぐらいだろうか。。京子は地図で確認した最短の出口、北口を目指し歩きだした。

休日だからか、人は多い。２０代女性が気になるような、こじんまりとはしているがお洒落なブティックがたくさん並んでいる。

京子は横目で見ながら、気になる店をいくつか頭に刻んだ。

少し歩くと、オフィス街に入った。ここはさすがに人通りが少なかった。いつもこの道を一樹が眠そうな顔で行き来しているのかと思ったら、京子はなんだか微笑ましくなって、知らない道でも不思議と慣れ親しんだように歩けた。

大きなビルに到着した。京子は上を見上げる。いくつか会社が入っているが、その中に一樹の勤め先の栄西株式会社の看板を見つけた。

ビルに入ると携帯を取り出し、名刺に書いてある番号を押した。

◇

風神はとても忙しかった。
先月、Aホテルで神取が言っていたように、次々とM区の献血センターから血液サンプルが送られてきていた。それらを整理するのが風神の仕事だった。
零児はその横で整理された血液を一つ一つ調べている。
もう1ヶ月も同じことを繰り返していたが、一向に見つからなかった。
風神はその作業とは別に、M区内で最近賃貸された場所を調べていた。
ここ最近の間に、賃貸されたマンションは3件。この中に神取が雇った殺し屋がいる可能性は高い。殺す相手が見つかったときに、すぐにでも動けるのが殺し屋の鉄則だ。だとすると殺し屋は今、血液提供者がいる可能性が一番高いM区にいるはずだと風神は考えたのだ。

風神は研究センターでの仕事を終えるとM区に行き、その3ヶ所を実際に見てまわった。とても危険な行為だったが、じっとはしていられなかった。自分も殺されてしまうかもしれないのだ。
今夜もM区に行き、確認する作業が残っている。他の2ヶ所とも殺し屋らしい人影は見られなかったから、ここがだめだとすると、もう一度ふり出しに戻って考え直さなければならない。
風神は祈るような気持ちでその場所へ向かった。

第１０章　嘘

いつの間にか、あたりは暗くなっていた。日が落ちるのがだいぶ早くなっている。

そんなことを思いながら、京子は電気もつけないままの暗い部屋で力の抜けきった体をソファーにあずけ、目線だけを窓に向けた。

一樹の会社から帰ってきてからずっと同じことを考えている。

結局考えても、考えても、なにも分かるはずもないのだけど思考を止めることはできなかった。

一樹は3ヵ月も前から、会社を辞めていたのだ。

京子は、あの時確かに、一樹の働いている会社の入り口で電話をかけた。

『はい。栄西株式会社です』

女性の感じの良い声がした。

『あの、わたくし、高科京子と申しますが、営業2課の小島一樹さんはいらっしゃいますか？』

『はい。少々お待ちくださいませ』

受話器からは、？メリーさんの羊？の電子音が流れてきた。京子は、ビックリした一樹の声を想像して笑顔になった。

しかし、なかなか？メリーさんの羊？は鳴りやまない。先方が、電話のことを忘れてしまったのかと思うほどだ。

少しいらいらしてきて、京子は自分の爪を眺めた。親指でマニュキアを擦りながら、明日にはぬりなおさなきゃと思った時、ようやく声がした。

『大変お待たせしてしまって、申し訳ありません。あの、小島一樹さんは、こちらにはいらっしゃいませんが？』

がっかりした。一樹はきっと、営業で外回りをしているのだ。会えないかもしれない、ということを考えてなかった。

だけど、携帯は返さなくてはいけない。
『あの、失礼ですが、小島さんは何時頃、そちらにお戻りになるでしょうか？』
『いえ、あの。小島一樹さんは、３ヶ月前に退社されておりますが』
『えっ？』
『３か月前に退社されております』
京子が聞こえないと思ったのか、女性はもう一度言った。
『いや、でも……そんなはずは』
『いいえ、確かに、営業二課の小島一樹さんは退社されております』
目の前が真っ暗になった。
どうにか電話を切り、それからどうやって電車に乗ったのかもわからないほど、ただふらふらと家路についたのだ。

確かに昨日、会社に行くと言っていた。
先日だって仕事の帰りに、先輩のマンションに寄り道していたじゃないか。
仕事が忙しくて、なかなか会えないとも言った。
京子の頭の中でさっきから何度も繰り返しているそれらは、すべてが嘘だったのだ。
なにも信じられない。何も聞きたくない。
今この瞬間でさえ、一樹はどこで何をしているのか考えたくない。
しかし京子の頭は、そのことから離れてはくれなかった。
一樹は、京子の一番身近な存在だった。もし、一樹が離れていくようなことがあれば、すべて失って何も残らないとさえ思う。そうしたら一体どうなってしまうのだろう。
京子は怖くなってソファーの上で膝を抱え込んだ。
きっと、狂ってしまうに違いない。
怖かった。一樹に問い詰めて真実を知り、そして別れなくてはならない状況になるのが京子はとても怖かった。だからと言って、一樹への疑惑を持ち続けたまま付き合うことも辛すぎるのだ。

心の中で何度も呟いては否定し、また呟いては悲しくなるだけだった。
いつもと変わらず優しい一樹。昨日も楽しく過ごしたのだ。優しい目をして見つめる一樹の心が、どうしても嘘だったとは思えなかった。一樹は、愛してくれている。このことには自信があった。好きな人と一緒にいれば、その人が好きか嫌いか、愛しているか愛していないかなんて案外わかるものだ。たとえ、他に女がいたとしてもだ。真実などいらない。疑惑を持ち続けたまま、それでも変わらない態度でいれば一樹を失うこともない。
京子はそうやってなんだかんだ理由をつけなくては、崩れそうだった。一樹を失いたくはない。これが絶対だった。今の京子にとって真実から目を背けることより、失うことの方が辛かったのだ。

どの位の時間が、経過しただろうか。すっかり暗くなった部屋で、一樹の携帯が鳴った。京子は相手を確認することなく、無言で電話にでた。
「もしもし」
「……」
「京子？」
「一……樹」
「あぁぁ！　よかった」
安堵した一樹の声が聞こえる。ただそれだけで、涙が滲んだ。

本当は、真実を聞きたい。今、どこにいるのか。今日は、何をしに行っていたのか。どうして嘘をついたのか。どうして仕事を辞めてしまったのか。京子は自分の中に渦巻く疑惑のすべての言葉を飲み込んだ。
「携帯、どうする？」
「今から取に行きたいんだけど、大丈夫かな？」
それから一樹は、携帯を忘れたことに気づくまでの経緯や、今日

してきた仕事について陽気に話しだした。嘘なのに本当のことのように話している。一樹が楽しげに話せば話すほど、今まで、必死でこらえていた嗚咽が漏れそうになる。これが今日より過去なら、どれだけ楽しい会話だったろう。
　京子は黙って聞いているふりをした。実際は、一樹の言葉は頭の中で瞬時にかき消されていった。

「京子、聞いてる？」
「ん……」
　京子はできるだけ、普通に答えたつもりだった。
「どうかした？」
「何が？」
「なんか様子が変だけど……もしかして、泣いている？」
「え？　あぁ……。うん、ちょっとね。今、テレビ見てたから」
　嘘をつく。疑っているということを、気づかれたくない。
「ほんとに？　なんだ、そうだったんだ」
「うん、ごめん」
「えっ？　ってことは俺の話、半分も聞いてなかったんだ？」
「聞いてたよ」
「何見てんの？　泣いてるってことはもしかして……」
「うん。ラブオアキス」
「やっぱりな……。いつもあれ見て泣くだもんな～　ほんとよく飽きねぇよな」

Ｌｏｖｅ　ＯＲ　Ｋｉｓｓ――
　なんてこてはない恋愛映画なのだが、ヒロインを一途に思うせつない英国紳士の物語に京子はすっかりはまってしまったのだ。
　映画を見たときからビデオを買おうと決め、それからテープが擦り切れるほど何度も見ているのに必ず泣いてしまう。その度に一緒に付き合わされる一樹はすっかり内容に飽きて、泣いている京子の

そばで寝てしまうのが常だ。

「でも、やっぱりなんだか心配だから今から行くよ。２時間はかかると思うけど」

ぼやけた視界で時計を見る。

「うん。わかった。待ってる」

一樹が好きだ。離れることなんて、できない。

第１１章　震え

ビルの屋上から小型望遠鏡を覗いている男がいた。
その向く先は、１００Ｍほど先にあるＭ区のとあるマンションだ。
風神はひたすら、そのマンションの住人を待ち続けた。ターゲットは６階の一番右端の部屋だ。今はまだ真っ暗で何も見えない。
かなりの時間が経過していた。風神はさっき買ってきたホットコーヒーを一口飲み、タバコに火をつけた。
だいぶ体が冷えている。足元には、すでに吸い尽くされたタバコが散らばっていた。夜空には、都会に似合わない綺麗な星が見えた。冬にむけ、空気が澄んできているのだろう。タバコをくわえながら両手を上にあげ伸びをすると、簡単にあくびが出た。
今日も眠れないのかよ……と、少し弱気になってみる。いやいやと首を横に振ると、両手で頬を叩いて気合を入れた。一体いつになったらゆっくり寝れるのだろうか。依頼を完了しなければ、そんな日は来ないように思えた。風神は溜息を吐くと、望遠鏡を再び覗いた。
部屋の明かりがついている。帰ってきたのだ。

風神は口にくわえていたタバコを吐き出し、靴で踏み消す。腕時計を一瞥する。すでに０時を回っていた。
望遠鏡の倍率を上げる。部屋のカーテンの隙間からスーツ姿の男が一人、部屋をうろついているのが見えた。しばらくしてビールを片手に戻ってくる。そのまま男は立ったまま飲みだした。どうみてもごく一般的なサラリーマンに見える。
風神はがっかりし、望遠鏡から目をはなそうとした時だった。
突然、部屋の明かりが消えた。男がベランダに出てくるのが街の明かりで何とか見えた。帽子をかぶっているようで、顔はよく見えない。右手に、何か持っている。男はゆっくりとそれを上げた。

風神は、もっと倍率を上げて男の手先を捉える。銃だ。男は、銃を構えてこちらを睨みつけていたのだ。なぜだか目が合った気がした。まさか、そんなこと、と思うものの体が金縛りにあったかのように硬直した。暑くもないのに汗は吹き出す。望遠鏡を覗いたまま、動けなかった。

帽子をかぶっている男の口が、かすかに動く。男は口角を上げ微笑んでいた。

どう考えてもその男から、覗いている風神の姿は見えるはずがない。まして、気づくはずはない。では、どうして風神に向かって男は銃を構えているのか。

風神は望遠鏡からようやく目を放し、ビルの陰に隠れた。自分の心臓の音がはっきりと聞こえる。あの、不気味に笑う男の顔を思い出すと叫びだしそうになった。確実に殺されると思った。あれがプロの殺し屋なのだ。今まで積み重ねてきた風神の腕など無意味も同然、到底敵うはずがない。現に、１００メートル以上はなれた場所からの覗きがばれたのだ。

風神は全身から震え上がった。

只者ではない。こんな男が存在するなんて――。

少し落ちつき始めた風神は、自分のしたことを後悔していた。もしあの場で殺されていたら、すぐに身元が割れ依頼主である橘の命もなかっただろう。

風神は急いで橘家へ向かった。

◇

男は、部屋に戻ると電話をかけていた。

「ねずみが1匹、うろついているぞ」

「どこのどいつかしらんが、殺してくれてかまわん」

「それは、依頼か？」
「相変わらず融通がきかない奴だな……。顔は見たのか？　今度見つけたら始末しろ」
「顔は見てないな。だが、威嚇しておいたから再び姿を現すとは思えんな。まぁ、よっぽどのアホじゃなければの話だが」
電話の相手はＪＩＮＮＯ製薬社長だ。
神取は情報が漏れていることに頭を悩ませた。どうにかしなくては今までの労力と金が無駄になってしまう。挙句の果てに莫大な金が手に入らなくなる。
神取は先ほどから吸っていた葉巻を握りつぶした。

◇

ようやく橘家に着いた風神はいつも通される部屋にいた。緑子は真夜中の突然の訪問にもかかわらず、嫌な顔ひとつしなかった。
すぐに橘が部屋に入ってきた。お決まりの挨拶もなく話し出した。
「随分と急な訪問だな。話してくれ」
「申し訳ありません。実は……」
風神は、殺し屋に会ったことを事細かに話した。話しているうちに強烈な恐怖を思い出し、途中で手が震え出した。
ずっと黙っていた橘だったが、風神が話し終えると静かにゆっくりと口を開いた。
「もう二度とその殺し屋に会ってはダメだ。もし会うことがあったなら確実に命はないからな。暫く君はＪＩＮＮＯ研究センターで大人しくしていなさい」
「はい。申し訳ありません。まったくの無駄、いや危険な行為でした」
風神は立ち上がり、深々と頭を下げた。
「いや、そうでもない。君のその行動で、手がかりがつかめたのは

確かだ。１００メートル以上も離れたところから人の気配を感じ取れる殺し屋は、そういない。調べればわかるかもしれない。それに、殺し屋が今の場所から移動することは、まずないだろう。M区から動くことはできないからな。それに殺し屋も同様、君の顔を見ていない。もし街角で会ったとしても、普通ならわからないはずだ」

「普通なら？」

橘がコクリと頷く。

「君は探偵の臭いが染み付いている。そのことに気づかれる可能性は高い。M区には近づかない方がいいだろう」

風神はうなだれたまま再びソファーに腰かけた。

橘は、一旦溜息を吐く。

「だが、君にやって欲しいことがある……」

「え？」

「断ってくれてもいい」

「いえ、聞かせて下さい」

橘は真剣な目をした。

結局橘からの依頼を引き受けた風神は自宅に戻っていた。依頼内容について、確かに危険なことだったがやってやれないことはないだろう、というのが風神の見解だった。いや、むしろどちらかと言うと、風神は橘の素性について考えていた。殺し屋に対し的確なアドバイスをした橘は、一体何者なのだろうか。それはずっと思っていたことだった。

今までは依頼主のプライバシーに一切関わらないようにしてきた。しかし、橘への疑問は膨らむばかりだった。依頼の内容といい、正確な推理といい、支払われる額といい、風神が仕事してきた他のどれとも違っていた。

とにかく今は、奇跡の血液を持つ人物が現れたら即、依頼の開始だ。

それまでは、大人しくＪＩＮＮＯ製薬研究員でいるしかない。

風神はベランダから冷たくなった空を仰いだ。

第１２章　血液

２週間ほど前から寒さが増してきていた。１１月もすでに残り少なくなっている。

朝８時の通勤ラッシュのさなかに京子はいた。どうにか電車に乗ると目の前にある吊革に手を伸ばす。駅員たちが必死に人を押しているのが窓から見えた。押し入れに宝物を隠しているかのように真剣な顔つきだ。なんとかドアが閉まると、ガタンと大きく揺れてから発車した。

京子の目の前に、短い制服のスカートをはいた女子高生が二人座っていた。朝だと言うのに妙なハイテンションで話している。聞き耳を立ててみると、恋の話をしているようだった。１０代も後半になればその話で一日中だって盛り上がる気持ちは分かる。ただ声が大きいので、隣に座っているおじさんは少し迷惑そうだ。

京子も高校生の頃は周りのことなど一切目に入らず、自分の目の前で起こる全てに一喜一憂していたものだ。恋もほとんどが独りよがりで、友達に何度も相談したり、泣いたり、笑ったり、悩んだり、そんな風に毎日過ごしてた。それでも、毎日元気で楽しかったはずだ。

しかし今はどうなんだろう。京子はずっと眠れない夜を過ごしている。いつから恋に不必要に慣れてしまったのだろうか。嘘をつくことを覚え、愛想笑いを覚え、純粋な気持ちをそのまま感じる時代はいつの間にか遠い過去となっていた。

一樹は相変わらず優しかった。何も変わらないように見えた。そうしようと思った。京子の精神状態は限界に達していた。

大きな駅を通り過ぎ、人も減ってきた時だった。急に目の前が暗くなる。

あっ、とそう思った時には既に遅かった。ヤバいと思いつつ吊革

から手を放し京子は後ろに崩れた。衝撃を受けたサラリーマンの男が迷惑そうに振り向いたが、京子の、おそらく真っ青な顔を見たのだろう。「大丈夫ですか？」と声を掛けた。
京子は「すみません」と消え入りそうな声で呟いた。と同時に視界が歪みだし周りの景色が渦を巻いた。そして、何かに吸い込まれるように意識は途切れた。

京子が次に目を開けたとき、薄暗い蛍光灯が見えた。ガラガラと音が鳴っている。どうやら運ばれているようだ。
「ここ　どこ？」
首を横に動かしてみる。頭はボーっとしたままだ。
「あ、気づかれましたか？」
頭上から声が聞こえた。
「だ……れ？」
「医者です。ここはＳ医療センターですよ。分かりますか？　あなたは、Ｓ駅付近の電車の中で倒れたんです。覚えてないですか？」
そうだった。電車で貧血になり、倒れたのだ。
「名前は？」
「高科京子」
「高科さんのお住まいは？　連絡をとれる方はいらっしゃいますか？」
うすぼんやりと一樹のことが浮かんだが、それは一瞬のことだった。まだ脳が正常に動いてくれない。
「Ｙ市のＭ区――」
医師の返事も聞かず目を閉じる。再び意識が遠のいていった。

京子が再び目を覚ますと、病院の一室と思われる部屋の窓から夕日が差し込んでいた。
今度は頭がスッキリとしている。すぐに会社を無断欠勤していることに気づき、京子が立ち上がると看護婦が姿を現した。

「何してるんですか！　まだ安静にしててください」
「えっと、会社に電話をかけに行きたいのですが」
「それじゃ、まもなく担当医からお話がありますから、電話が終わったら診察室に来てもらえますか？」
看護婦は溜息をつきながらも了解してくれた。
京子は院内に設置されている電話ボックスに入る。会社の上司に事情を話し、なんとか『お大事に』と言う返事をもらうと診察室へと足を運んだ。
医師の説明は短時間で終わった。極度の疲労からくる重度の貧血だと言っていた。2、3日安静にしていれば回復するらしい。ただし、念のため血液検査することを告げられた。
京子は血液を採取し、帰宅した。

◇

医師は血液を少量、他の試験管に移しＪＩＮＮＯ製薬研究センターに送った。
沢田だった。神取からＭ区に住む患者の血液をＪＩＮＮＯ製薬研究センターに送れと言われていた。
Ｍ区にある献血センターの血液を調査してからもう、2ヶ月が過ぎていた。少しでも多くの血液を調査する必要があったのだ。
神取は、Ｍ区に奇跡を起こす血液があると言っていたが本当なのだろうか。Ｍ区に限定するのはあまりに無理があるように思えてならなかった。

◇

京子は仕事にいけない2日間を寝て過ごした。この2日間、はっきり言って地獄だった。仕事をしている間だけは一樹のことを忘れられていたからだ。ベッドの中にいると恐ろしく時間が長い。嫌で

も考えてしまう。疑惑を持ち続けながら一樹と一緒にいることが、体にも支障が出るほどに限界だった。

◇

数日後、ＪＩＮＮＯ製薬研究センターの一室から歓喜の声が上がった。

声の主は赤月零児だ。その声を聞きつけた風神が走りよった。

「どうしたんですか？」

「やったぞ！」

その一言で、風神は何が起きたかを察知する。

「おめでとうございます！！」

喜んでいるように見せた。

零児がついに、癌細胞をＩ成分に変える血液を見つけたのだ。

「社長に連絡してくる」

零児は大股で部屋を出て行った。

いずれ消されるとも知らず、ただ社長を信じている。自分に世紀の発見をさせてくれた偉大な人だと思っているのかもしれない。これで癌から人類は救われ、自分の名は後世残る偉大な研究者だ。そう思っているのかもしれない。探偵の風神から見れば、零児は研究に対して純粋なあまり、世の中のことには何一つ知らないように見えた。

風神はすぐ、その血液者の名前と住所が書いてある紙を探し出した。そして、ポケットに手を突っ込む。中に用意しておいた小さな紙と鉛筆で書き写した。

それは探偵がよく使う手段だった。移動中の場合や張り込みの際に、相手に気づかれることなく記録できるのだ。古風な手だが、他の研究者たちもいる。人の目がある際には適していた。

３０分後、零児が帰ってきた。

社長の神取が言うには、血液中から突然変異させる成分を取り出し、本当に全ての癌細胞を死滅させることができるのか、ということ、さらにその成分を繁殖させることができるのかを引き続き調査しろということだった。しかも、期間は3日しかないと言う。零児は血相を変えて、個人の研究室に籠った。

連日徹夜で、ここ最近ちゃんとした睡眠をとっていないはずだ。それでも零児は神取の言うとおりに3日後には結果を出すだろう。零児はある意味、天才だった。

名前と住所が判明した。となれば、急がなくてはならない。

先月、橘に言われた依頼を実行しなくてはならなかった。もちろん、零児が結果を出す前にだ。

依頼内容は、血液保持者を橘家へ連れて行くことだった。失敗すれば、確実に殺されるだろう。

なんとしても、その人を橘に会わせなければならない。

◇

ＪＩＮＮＯ製薬の社長神取は、受話器に向かい口を開いた。

「見つかったぞ。とりあえず三日後だ。三日後に正式に依頼する」

「ずいぶんと待たせるんだな。それで、ターゲットは？」

神取は、零児が持ってきた血液者リストの赤いペンで丸く囲まれた部分を読んだ。

「高科京子。Ｙ市Ｍ区〇〇町×××××－８０９。まだ殺すなよ」

「……」

「おい、聞いてるのか？」

「３日後に」

電話が切れた。

第13章　車

風神は、悩んでいた。どうやって怪しまれず、その人を連れ出すか。

本来ならば殺し屋がいるM区で気づかれずに人を連れ出すには、かなり念入りな計画が必要だった。しかし、時間がない。今日が約束の3日目だからだ。

風神は車でM区に向かっていた。助手席に、血液保持者の情報が記された紙と写真がクリップで留めて置かれている。風神が調べたものだ。

アクセルを踏み速度を上げる。先ほどから頭に思い描いているシナリオを、実行に移すことにした。

少々手荒で危険ではあるが、なんとかなるだろう。

◇

その日、京子は残業もなく早い時間に家路に着こうとしていた。日中は暖かくても夜は冷える。吐く息も白くい。

コートを着ていなかった京子は、さすがに震えた。家に着いたらゆっくりとお風呂に浸かってホットワインでも飲もうと考えながら、信号が点滅している横断歩道を走って渡ろうとしたときだった。大きな高音が耳を貫いた。何が起こったのだろうか。頭は真っ白だ。京子は咄嗟のことで足が絡み、後ろにひっくり返っていた。横にある車を見て、さっきのは急ブレーキの音だと気づく。信号無視の車が突っ込んできたのだ。前方で止まった車から男が降りてきた。

「……で……か？」

「え？」

「大丈夫ですか？」

おかしかった耳が、音を取り戻す。やっと聞き取れた男の言葉に、

京子は自分が無事であることをやっと確認できたのだ。
ゆっくりと立ち上がると、すっかり汚れてしまった服を叩いた。
「大丈夫……です」
「本当にすみません！！」
「いえ、私もボーっとしていたものですから」
「お怪我ありませんでしたか？」
「えぇ、大丈夫です」
「もしよかったらこの近くに家がありますので、そちらで服の弁償と、手当てをさせてください」
男は、深々と頭を下げる。
「そこまでしていただかなくても、本当に大丈夫ですから！」
「でも、本当に。僕の気が済みませんから」
「本当に何ともないですから！！」
京子は、恥ずかしさもあって早くこの場を去って家に帰りたかった。
しかし男は、京子の腕を掴み頭を下げ続けた。
「お願いです、お願いします！！」
男は妙にしつこく、なおもくいさがってくる。手も放してくれそうにない。
ここで言い合いをしてても、注目を浴びるだけだ。ならいっそのこと、男の言い分に従った方が早く済むかもしれない。
京子は、ちらりと腕時計を見る。まだ7時前だった。
「車ですぐですから！」
「じゃあ……少しだけ」
その言葉を聞いた男は安心したかのように笑うと、京子を車に誘導した。
車が走り出してからこの男は、最初に名前を言っただけで終始無言だった。乗ってからすでに４０分が経過している。
京子は後悔していた。

なぜ車に乗ってしまったのだろうか。知らない男の車になんかに……。自分の軽はずみな行動にあきれて溜息が漏れた。
「風神さん、あの！　お住まいはどちらですか？　近くだって言ってたのに」
「え？」
「お宅が、ここから近くにあるって……」
「あっ、えっと、すみません。考えごとをしていたもんだから」
京子は少なからず、ムッとする。
そんなにボーっと考え事をしてるから、人を轢きそうになるんだ、この男。
軽蔑のまなざしを、運転席に向けた。
「いやほんと、失礼。私は、探偵です」
「探偵？」
「少々ややこしい話ですので、後ほどゆっくり話します」
「は？」
京子は唖然とした。
少々ややこしい話って……。もう十分わかないことだらけなんだけど、とポカンと口を開ける。
素性の知れぬ、しかも、自分とは全く接点のない探偵という職業。半ば、拉致された状況。どう考えても怪しい。
チラッと、運転している風神を見る。
新手のナンパ？　それとも誘拐？
考えれば考えるほど、京子は悪寒がしてくる。
「もう、止めてください」
車のドアに手を掛ける。
「え？　困ります」
「こちらだって、困ります」
「もうすぐですから」
「もうすぐって？　一体どこに行くんですか」
「私の依頼主の所です」

車が信号で止まった。
風神が、京子の乗っている助手席に手を伸ばしてきた。瞬間、ビクッと体が硬直する。
「あはは。そんなに、怯えないで下さい」
苦笑いしながら助手席のダッシュボードを開けて何かを取り出すと、京子によこした。
「え？」
「傷」
「ん？」
「手」
京子は、自分の手を見た。右の手のひら横に、すり傷があった。
「あっ」
全然痛みがなかったので、気づかなかった。
「怪我をさせてしまって、申し訳ない」
信号が青に変わる。
京子は迷った挙句、貰った絆創膏を傷口に貼った。血が、服につくのが嫌だったからだ。
貼りおわると、再び運転に集中する探偵に視線を送る。
「どうしてですか？」
「え？」
「擦りむいてたの、自分でも気づかなかったから」
手のひらのこんな分かりづらいところ、他人がどうして気づいたのか京子は不思議だった。
「傷？　あぁ、職業柄、観察は鋭いほうで」
探偵は、少し笑いながら答えた。
「絆創膏、ありがとう……ございます」
「いや。こちらこそ、ビックリさせて悪かったね」
京子は、もう1つ手渡された紙に目を落とす。それに気づいた探偵が、車内のバックミラーのそばにあるスイッチを押して電気をつ

けてくれた。
京子は明るくなった電気に視線を奪われたが、すぐに紙に集中した。
そこには、自分の名前、生年月日、年齢、住所、そして、写真が添付されていた。
「何……これ？」
怒りと怖さから、口に手をあてたまま動けない。
「高科京子。２６歳、１９７６年８月２０日生まれ。Ｂ型」
横から、探偵の声が聞こえた。
「なん、何なんですか？」
信じられないと、目を大きく見開く。
「調べさせてもらった」
「何で、こんなこと」
「必要だからです」
「どうして」
「すみません。これも仕事なんです」
「降ります。降ろして！」
シートベルトをはずそうと試みるが、探偵の手が伸びて阻止された。
「嘘をついて、君を車に乗せたことは謝ります。だけど、降ろすことはできない。どうしても、君に会いたいって人がいるんだ」
「私に会いたい？　誰が？　そんなこと私に――」
「その方の名前は、橘と言います」
探偵が京子の言葉遮った。
「橘？」
聞いたことがない。知り合いでもない。理解できない。分からない。最近そんなことだらけで、悲しくなる。
両手で顔を覆い、京子は下を向く。そして固く目を閉じた。
何もかも、どうでもいい。分からないと叫んだところで、どうせ

誰も答えてくれない。問い詰めたら、終わりだ。
でも、もういい。もう限界だ。だって、しょうがない。信じれるものがない。一樹に……愛されてる自信がない。こんなのは大嫌い。もう、疲れた。眠りたい。

京子の頭の中で、もう一人の自分がまた喋り出す。

あきらめられる？　わからないままで？　このままでいいの？
何が怖いの？　ボロボロじゃない。何を今さら、怖がってる？　真実を知らないまま、傷だけを負って、そうやって生きていくの？

「大丈夫？」
風神が声を掛けると同時に、京子が髪を振り上げ起き上がった。

このままでいい筈がないんだ。自分と向き合わなきゃいけない。真実を嘘で固めていてはいけないことも、逃げるのをやめなきゃ前に進めないことも、もうとっくに分かっていた。進める勇気がなかったから、辛かったのだ。
解決方法なんてない。だったら進むだけ。
家に着いたら一樹に電話してみよう。全部話して、終わりしよう。

京子は、まなざしに思いを込め、探偵を睨みつけた。
「その人に」
「え？」
「その人に会えば、全てわかるの？」
「たぶん」
ふぅ、と一息つく。
「タバコを吸ってもいい？」
「どうぞ」と言って、探偵は車についている灰皿を開けた。

第１４章　信じる心

目的地に着くと京子は唖然とした。とても広い家、というより屋敷といった方が当てはまる。こんな家に入るのは初めてだった。少し緊張した面持ちで京子は探偵について行くと、綺麗な婦人が笑顔で迎え入れてくれた。

部屋に通されると、品のよさそうな男が座っていた。

「初めまして、高科さん」

男は、京子に視線を送ると立ちあがった。

「驚かれたでしょう」

京子は違和感を覚えた。他人の家で、初対面の人が自分に笑いかけてくれている。

「あの……？」

探偵の方を向き、助けを求めた。

「こちらが、橘さんです」

「えっ、あっ、初めまして……」

ぺこりと頭を下げる。

「こちらこそ、初めまして。ずっとお会いしたかったんですよ」

「はぁ」

「初めてお目にかかるのに、お話したい事があると言われてもお困りでしょうが、まぁ、お座りください」

京子は橘に言われたとおり、目の前にあるソファーに腰を下ろした。その隣に、探偵が座る。

「時間がないので、手みじかに話します。どうか、落ち着いて聞いてください」

橘が強いまなざしを京子に向けた。

「今、あなたは命を狙われています」

「は、え？」

予期していなかった言葉に、声が裏返る。京子は頭が真白になっ

た。

それから橘は、京子に流れる血液のこと、それを巡ってＪＩＮＮＯ製薬で行われようとしていること、殺し屋に命を狙われている理由、それが明日であること、を簡潔に話した。

京子は、これらのできごとが嘘でないと実感すると震えだした。

「どうして、私が」

自分が殺されるという現実に、吐き気がする。

「ええ、そうでしょうね」

「どうしてこんなことに……」

「あなたの血液は、膨大な金を産みます。そこに目をつけた悪い人がいるのです。彼らにはあなたの意思は関係ないのです」

「そんな、ひどい」

京子はただ震えることしかできない。理不尽な運命に、涙が止まらなかった。

「ほんと、ひどい話です。あなたに罪は一つもない。残念ながら、この世にはこれがまかり通る裏の世界というものが存在するのです。表の人間がどうあがいても、まず無理でしょう」

「じゃぁ、一体どうすれば！」

「私が」

「え？」

橘が立ち上がり、京子の傍に座りこむ。

「私に何とかさせてください」

「どういうことでしょうか？」

「３年前、私はあなたの血液に救われました。私は末期癌でした。助かる見込みはなかった。しかし、奇跡的にあなたの血液が輸血された。癌細胞は死滅し私は助かりました。だから今度は、私があなたを助けたい」

京子の手を取ると、ギュッと力強く握った。

「私を、信じてください。あなたを必ず助けます」
京子にとっては、初めて会う男だ。普通なら信じられるはずもない。
だが、強い瞳をもつこの紳士を不思議と信じれた。信じるしかなかったし、すがる人が他にいなかったからかもしれない。だとしても、握られた大きな手からは優しい温もりとホッとする何かがあった。
今の京子にはそれだけで十分だった。

どのぐらいの時間が経ったのだろう。少しずつ、京子は自分の置かれている立場を理解できるようになっていた。もちろん何度も質問し、時には泣きじゃくった。そんな京子を橘は根気よく慰め、励ました。

ようやく落ち着いてきたころ、京子はふと時計を見る。すでに11時を過ぎていた。
「やだ、もうこんな時間。そろそろお暇しなきゃ」
「いいえ」
京子が席を立とうとしたが、橘は首を横にふる。
「なぜですか？」
「危険なのです。暫くこの家にいてください」
橘は、安全を確保できるまで家にいること、身の危険が直ぐそこまで迫っていることを丁寧にゆっくりと話した。
「でも、着替えも持ってきていないし、一度家に帰って持ってきたいものもあります」
「それは、我慢してくれませんか？」
京子はきっと長居するであろう橘の家に、写真を持ってきたかった。一樹と、しばらく会えなくなるだろうし、せめて写真を側に置いておきたかった。本当は、声を聞きたいし、電話をしたい。だが、外部との接触は橘に禁じられていた。

「せめて、大事なものだけでも取りに行かせてください」
橘は数秒、うなり声を上げて困った顔をしたが、「……わかりました。いいでしょう。ただし、私も行きます」と席を立った。
「ありがとうございます」

すぐに車が用意された。風神が運転し、その後ろに橘と京子が乗り込む。
緑子が心配そうに手をふった。

◇

ＪＩＮＮＯ製薬研究センターでは、零児が睡魔と戦っていた。すでに血液が、全ての癌細胞を死滅させることがわかっていた。あとはこれを増やせるかどうかだ。
「もうすぐ。もうすぐだ」
零児は研究室にある洗面所の鏡を見ながらブツブツと呟いた。
水道の蛇口を思いっきりひねり、ジャバジャバと音をたてる冷たい水を掬って顔にたたきつける。ひんやりとして皮膚に緊張が走ったが、それはすぐに消えた。眠気に負けている場合ではない。あと少し、あと少しだ、と零児は自分に言い聞かせた。
研究室に戻ると、零児の眠気は一気に吹き飛ばされた。零児は、震える手ですでに帰宅しているだろう神取に電話をかけた。

第15章　涙

車は、京子のマンション前で止まった。
すっかり夜は更け、周りからは物音ひとつしない。エンジン音だけが、その場に静かに響きわたった。
京子は荷物を取るためにマンションに入った。エレベータにのると、大きな溜息がでる。
まさか、今日一日でドラマのような展開に巻き込まれるなんて、思いもしなかった。一人になると、どっと疲れがでてくる。今は、何も考えたくない。ただ、早く眠りたかった。
エレベータが到着し、鞄の中から鍵を取り出して部屋のドアの前で立ち止まる。カチャっと聞きなれた音を確認すると、ノブに手をかけた。が開かない。
朝、バタバタしてかけ忘れたのかしら、と思い直し鍵を反対に回してドアを開けた。
京子は、靴を脱ぎ真っ暗な部屋へ歩を進める。
いつもの部屋なのに、酷く不気味に見えた。動機は激しくなる。
誰かいる？
ドアの鍵が開いていたことと、橘の危険だという言葉を京子は思い出していた。急に怖くなって背中を丸め、すぐにそばにある電気のスイッチをそっと押す。
部屋が明るくなると、今度は安堵のため息を漏らした。
「なんだぁ、もう、脅かさないでよ」
ソファーに座っていたのは、一樹だった。
「どうしたの？　もしかして電話くれてた？」
一樹は何も答えない。
京子は不思議には思いながらも、時間がないのでとりあえず奥の押入れから大きめの鞄を取り出し、服を詰め込む作業に取りかかる。
「せっかく来てくれたのに、悪いんだけど、これからまた出なきゃ

いけないの」
一樹は、沈黙を保つ。ただ、じっとソファーに座ったままだ。
返事がない。京子は首を傾げる。
服をある程度詰めたあと、今度は寝室に行き、アルバムから写真をいくつか取り出し手帳にはさんで鞄に放り投げた。
「いたいなら居てもいいけど、しばらく帰れそうにないの。理由はちょっと話せないんだけどさ、あっ、そうだそうだ！」
テーブルに置いてある箱根の写真を持っていこうと写真たてを手にとった時だ。後ろで、動く気配がした。本能で瞬間、体が固まる。
「知ってるよ、全部」
「えっ？」
何のことかわからず、一樹の方を振り向く。
京子は眼を見開いた。
一樹が自分に銃を向けていたからだ。
いつもとは違う低いの声。なぜだか不思議と納得したら、力が抜けた。
写真たてが京子の手を離れ、床に砕け散った。
「冗談、やめてよ……」
一樹からは、何の感情も読み取れない。しかしそれが、冗談などではないことを示していた。

この男は、ＪＩＮＮＯ製薬の雇われた殺し屋なのだろうか。
そんなはずない。一樹は自分の彼氏だ。そんなはずない。違う、違う！　京子は頭を抱え、これまでの一樹の行動と、橘が話していた事柄を重ね合わせていた。
京子の知らないマンションに一樹がいたのは、殺す相手がＭ区にいると知って、そこで張っていたから。
携帯の無言電話は、おそらく依頼主からの電話。
仕事を辞めたのは、ＪＩＮＮＯ製薬から依頼を受けたから。

そして今、ここに居るのは、自分を殺すために雇われた殺し屋だからだ。

頭の中で見事に一致してしまうのを、京子は必死で食い止めようとした。だがどう考えても、時期がぴったり合いすぎているのだ。

否定したい気持ちが大きいのに、事実は、一樹が殺し屋であることを指し示していた。

声のない涙が、頬を伝わる。

「嘘、でしょ？　だって……」

京子は、誰に向けたわけでもなく言った。

今までの過去が、全て偽りのものとは思えなかった。少なくとも、今ここで拳銃を向けている一樹と彼氏の一樹とは全然違うのだ。

ずっと浮気をしていると思ってた。電話がつながらないのも、嘘をつかれたのも、忙しくて会えないと言ったのも、心の奥で一樹が本当に愛してくれていると感じていたから耐えてこれたのだ。それだけは、嘘ではないと感じていた。一樹は、殺す相手が恋人だったと知らなかったに違いないのだ。京子はそう思いたかった。

「できるわけない……一樹にできるわけないよ！」

わずかな可能性を信じてみたくて、叫んだ。

「だって、愛し――」

小さな音がして、何かが左頬をかすった。

それは一瞬のできごとで、何が起きたのかも分からなかった。

確かに瞳は開いているのに、何も見えない。

頬からキリキリとした痛みが走る。手を当ててみると、ヌルッとした感触が手先から伝わった。自分の心臓の音が妙にはっきりと聞こえるだけで、周りの音がしない。ひどく静かだ。

濡れた自分の手を見つめながら、一樹が自分に向かって引き金を弾いたことだけは理解した。

確実に殺される。今まで一緒に過ごした日々がまるで、何もなかったかのように。
目の前に居るのは、殺し屋なのだ。いつもの優しい目も、口も、雰囲気も、何もかもが別人だった。
京子は、今になって恐怖が増してきた。死を身近に感じ、一樹が知らない男に見えていた。
逃げ出そうとした。が、思うように走れない。
玄関までの距離、とても近いのに果てしなく遠くに感じられた。足がもつれ、倒れる。殺し屋は、少しも焦ることなくゆっくりと近づいてくる。京子は四つん這いになって、必死で玄関の方へ移動する。焦っているせいか、ドアノブに手が届かない。頭上で？カチリ？と音がする。そしてこめかみの辺りに、何かがあてられた。
呼吸が、一瞬止まる。頬に、血と涙が混ざり合った。
殺される！
京子は、強く目を閉じた。

第１６章　絶望

風神は、車内でタバコに火をつけた。橘が車を降りてから１０分が経過していた。

橘は突然車から降り、マンションへと入っていったのだ。

何を感じ取ったかは、風神にはわからなかった。

マンションから人が出てきた。こんな夜更けに出歩く人がいるのかと、目で追った。長めの薄いコートが、歩くときの風でめくれ上がる。胸に光るものが見えた。まちがいない、殺し屋だ。

あの時、望遠鏡で見た男がこちらに向かって歩いてくる。男の視線はどこか彷徨うような曖昧な不気味さで、風神は息を呑む。確実にこちらに近づいてきていた。もしかしたら、殺されるかもしれない。風神は視点を定めたまま、暗闇に身をひそめた。ある距離で殺し屋がぴたりと止まった。こちらを見ているような気がしたが、帽子で確認できない。殺し屋は音もなくそのまま向きを変え、通り過ぎていった。

目が合ったのではと思っていた風神は、しばらく動けなかった。

１０分後、橘が高科京子をかかえて戻ってきた。

顔色が悪く、ぐったりとしている。死んでいるように見えた。

「まさか？」

「いや、気を失っているだけだ」

風神は助手席のドアを開け寝れるように倒してから、京子を受け取り助手席に移した。

顔には、血が付着している。３センチほどの傷が生々しく、左頬を血で染めていた。

この流れる血が癌を死滅させるのだ。何も知らない、ただの女の子なのにな……と、風神は不憫に思った。

運転席に戻ると、橘の指示で病院に向かった。

◇

京子は夢を見ていた。あんなに眠れなかったのに、今はずっと眠っていたいような気がする。

夢の中で、一樹が笑った。いつもの待ち合わせに場所に、一樹が遅れてやってくる。言い訳をしている一樹を見て、京子も笑う。手をつないで、町を歩いた。怖い映画を見て、隣でびくびくしている一樹をからかった。

『怖いの苦手なくせに、見たがるんだから』

『だってさ』

くだらないことで喧嘩した。

公園のベンチに座って、風を浴びながらいろんな話をする。

心地良くなった京子は、大きなアクビをひとつ。

『でっけぇー口だな』

『だってさぁ』

一樹の肩によりかかる。一緒にビデオを見た。買い物もした。家具を見に行って、売り物のソファーに座った。

『こんな、ソファー欲しいね』

『買ってやろうか？』

『ホントに？』

『嘘だけど』

『ひどっ！』

『サンタにでも頼みな』

一樹は、意地悪な顔をする。

クリスマス、二人で夜景の綺麗なレストランで食事した。そんなベタなデートもたまにはいい。

京子は時計をプレゼントとした。『もったいないから』と、一樹は毎日しなかった。

船に乗る。海を見た。二人はより添い、何もかも幸せだった。

笑い声だけが響き、白く光を放つ。それから背景は歪み、景色は反転する。

暗闇だ。規則正しい足音が聞こえる。誰かがやってくる。ドアの前でピタリと音が止んだ。

ゆっくりドアは開く。誰かが近づいてくる。京子の手を握りしめ、ずっと見つめている。

悲しげで、ひどく切ない表情。

誰なの？

手に水の粒があたる。

泣いている？

どうしたの？　どこか痛いの？　なぜそんな目で見るの？

手が痛い。放して。

ねえ、誰なの？

京子は、何かわからないものに必死で叫んだ。

すると、黒い影は名を呼んだ。声を押し殺して、泣いているようだ。とても悲痛な何かが、ダイレクトに伝わってくる。

自分は何かを忘れてるのか……。京子がそう思ったとき、手から温もりが消えた。

待って！と、声をかけても届きはしなかった。

静かに影は消える。京子を残して。

◇

目に飛び込んできたのは、明るい太陽の光だった。

眩しくて、一度目を閉じる。目を開けるのが苦痛なぐらいに、ずっと暗闇の中にいたらしい。

今度はゆっくりと目を開けてみる。ぼやけた視界の中に、白い天井と、明かりのついてない蛍光灯が見えた。
手のひらに重みを感じて横を向くと、橘家で見た夫人が手を握っていた。
「気分はどう？　心配したのよ」
緑子が目を細めた。
「あなたは、3日も気を失っていたのよ」
「3日？　って……私、なんで」
「思い出したくないでしょうけど……」
その言葉で、京子の脳は急速に覚醒する。
一樹が、銃を向けた事実。モノクロ無声映画のように、コマ送りに脳に甦る。左頬に手をあててみると、ザラっとした感触のテープが貼られていた。
涙があふれ、京子は叫んだ。
「やーーーー！」
「京子さん」
「なんで、どうしてなの」
「落ちついて」
京子は無理だと首をぶんぶんと横にふる。
「橘を呼んでくるから、待ってて」

どうやらここは、病院のようだ。個室なのだろう、京子以外は誰もいなかった。
緑子が出ていくと、京子は自分を抱え込むようにして小さくなる。小さく震えながら必死に何かに耐えようとしていた。
ノック音がして、二人が入ってきた。
「気づきましたか」
橘は、微笑んだ。
京子もそれに応えようと口を不自然にゆがませた。
橘は、ベッドのそばにある丸い椅子に腰を下ろした。

「気づいたばかりで申し訳ないですが、大事な話をしてもいいですか？」
　こんな時にと思ったが、どうせ、聞かねばなるまい。京子は覚悟を決め、頷く。
「２週間だけですが、京子さんの、命は保障されています」
「え？　それはどういう……」
「私は、殺し屋に勝負をもちかけたのです」
「勝負？」
「めちゃくちゃなように見える裏の世界にも、ルールはあります。殺し屋同士が勝負と決めた場合、その間、誰であっても邪魔はできないのです」
　橘は一度視線を落とすと、再度京子を真っ直ぐ見つめた。
「殺し屋にとって、勝負は一度きり。生きるか死ぬかしかありません。残念ながら私が死ねば、あなたの命もないと思ってください」
「そんな」
　京子は唇を噛みしめる。
「誰も、死なない選択はないのでしょうか？」
「ヤツは、プロです。彼が生きている限り、あなたは狙われます」
「じゃあ、どうすれば」
「根絶するしか方法はありません」
「それは、殺すということですか？」
「無論、そうなります」
　京子は、泣き崩れるしかなかった。

　こめかみに銃が突き付けられた時、京子はドアが開く音を聞いた。助けが来たと思った。すがるように目を向けると、橘が一樹に拳銃を向けて立っていたのだ。
　京子はそのまま気を失ったが、おそらくその時、話し合いが行われたのであろう。
　それが、まさか、こんなことだったなんて……。

「負けるつもりは、もちろんありません」
そう力強く言った橘は、京子が泣き崩れた意味を勘違いしたのかもしれない。
死の恐怖に震える、女性にしか映ってないのだろう。
まさか、殺し屋が恋人だと、知る由もない。
「京子さん。橘は必ずやり遂げますから。安心して」
緑子が、優しく京子の肩に手を添えた。

一体、何者なのだろうか。ここまで、裏の世界とやらに詳しい。
それに、言葉の節々には、確かに自信がうかがえた。
そんな、京子の思いを見透かすように橘が口を開いた。
「引退しましたが、私も裏の世界で生きてきた男です。腕なら、信じて下さい」
それを聞いた京子は、さらに声を上げて泣くことしかできなかった。

橘と緑子が出て行った。
自分が助かれば、一樹は死ぬ。
自分が死ねば、一樹は助かる。
こんな設定はおとぎ話だから面白のであって、現実にしてしまっては、あまりに残酷だ。
二人の未来は、いつか重なると思っていた京子の絶望は果てしない。
泣けばなくほど、一樹への想いが吹き出して、そして壊れていくような気がした。
だけども今は、止めることはできなかった。

ドアの叩く音がして、緑子が入ってきた。京子は泣きじゃくりながらすがりついた。

「もう……どう……したら、いいか」
緑子はすがる京子を強く抱きしめた。しかし、優しい温もりが、京子の弱い心をさらに加速させる。
「どっち……か……なんて……選べ……ない……よ」
「え？」
「かれ……なんです」
「だれ？」
「殺し屋……」
抱きしめられていた京子は、ひきはがされた。
緑子の目は微かに揺らいでいる。そして、とても悲しそうに唇をぎゅっと結んでいた。
「聞いて、京子さん。自分が死ぬのも、彼を見殺しにするのも運命なんかじゃないのよ。あなたが決める事なの。あなたしか、選べないの。あなた以外の誰にもよ！」
京子の目をまっすぐに見つめ、少し強い口調で言った。
「ただ、橘は、あなたに生きて欲しいと願っている。そのために自分の命を賭けているの」
京子ははっとして、緑子の顔を見た。
一樹に生きていて欲しいと願うことは、自分はもちろん、橘も死ぬことになるのだ。緑子だって決して辛くないわけじゃないのに、京子は自分のことで頭が一杯になっていた。
「あの、ごめ……んな……さい。　私……橘さんだけでなく、奥さんにまで……辛い思いをさせていたなんて」
「京子さん、私はね、橘の妻ではないんです」
「えっ、でも」
「みなさん勘違いなされますけど、結婚してるわけではありません。そうはいっても２４年間ずっと一緒に住んでいますから、夫婦のようなものかもしれませんが……。私の夫になるはずだった人は、２４年前に死んだんです。殺されたんです。橘に」
驚きのあまり、京子の涙は止まっていた。

「婚約者が死んだとき、私は何度も死のうと思ったわ。だけど、そんな私を助けてくれたのがあの人だった。いつからかしらね、彼に恋心を抱いたのは……。そう時間はかからなかったかもしれないわね。そんな時、知ってしまったの。あの人が婚約者を殺したことをね。殺してやろうと思った。でも、できなかった。彼を愛してしまっていたのね。自分が思うよりも強く。だから今もこうして一緒にいるんです。薄情だと思うかもしれないけど、今ではあの時死ななくて良かったと思ってるの」

「そんな……」

何と言ったらいいかわからない京子に、緑子の表情は緩み、さらに言葉を続けた。

「あの人が私と結婚しないのは、婚約者を殺したという罪の意識が今もあるからだと思うわ。確かにその事実は、一生消えない。私も決して忘れない。許しもしない。だけど一緒にいることで、殺し屋だった彼の罪は私の罪でもあるの。私達は、一緒に償っている同士のようなものかもしれません」

遠い目をして話す緑子は、今にも消えてしまいそうだった。

京子は自分の押さえ切れない感情で、緑子に話してしまったことを後悔していた。

もし、殺し屋が自分の恋人だと知れば、過去に婚約者を殺した時と重なってしまうかもしれない。辛い思いをさせてしまうかもしれないのだ。

そんなこと、京子は望んではいない。感謝こそすれ、苦しめる気なんて全くないのだ。

「あの、緑子さん。殺し屋が私の彼だってことは、橘さんには内緒にして下さいますか？」

「ええ、京子さんがそう言うのなら……。でも、橘は見抜くかもしれません。彼は、プロですもの。相手が何を考えているか、何を思

っているか、何を見ているか、すぐにわかってしまうのよ。わかりたくない時もあるのに……。かわいそうな人」
切なそうに遠くを見ながら、緑子は呟いた。

◇

その夜、京子は、病室の布団で眠りに入ろうとしたがなかなか寝付けなかった。目を瞑って、一樹と出会ったあの雪の景色を思い出そうとした。つい最近の毎日、眠れぬ夜に思い出すといい夢が見れるはずだった。今は、あんなに鮮明に思い出せていた景色は無色で、その時感じた想いも、何も思い出せなかった。もしかしたら、脳がそうさせているのかもしれない。
それではと、次に京子は橘が言っていた事を考えた。
とりあえず2週間、命の保証はあるわけだ。ということは、大胆な話だが、一樹に会っても何もされないということだ。
そう思ったら、一樹に会いたい気持ちが浮かび上がった。でも、それはすぐにかき消される。
会えない日はあんなに恋しく思えたのに、今はそれが辛いだけだった。幸せな日々が、逆に京子を苦しめた。大事な思い出が、今は、自分に牙をむくのだ。
この辛い状況を生きぬいてまで、悲しい運命を切り抜ける必要があるのだろうか――。京子は暗闇を見つめた。
しばらくすると、緑子の言葉が頭をよぎった。

『あの時死ななくて良かった』

でも、そう思えるまでにどれだけの時間が必要だった緒だろうか。京子は自分が耐えられるのか、想像すらできなかった。自分が死ぬことで、一樹が無事ならばその方が楽だとも思った。
ならばいっそう、自分で命を絶とうと考えた。恋人に殺され、死

ぬ瞬間まで辛い思いをするなんてまっぴらだった。自分がそうすることで、橘も無事だ。犠牲は最小限ではないか。そう思ったら、それが最良の方法だと思えてきた。
だが、いつまでたっても緑子の言った言葉が、耳からはなれることはなかった。

ベッドの横にある窓が、風で小刻みに震えた。外は強風なのか、冷たい風が窓のわずかな隙間から入り込んでくる。
寒さを感じた京子は、布団を肩まで寄せて寝返りをうった。硬い何かが頭に当たる。細長い貴金属のようだったが、暗くてよく見えない。ベッドの横についている電気をつけてみる。
浮かび上がったのは、銀色のネクタイピンだった。
首をひねりながらピンを裏返すと、息を止めた。
「そんな……」
ネクタイピンの裏に、名前と日付が彫ってあるから間違いない。それは、京子が一樹の誕生日に贈ったものだった。
感情より先に、涙が滲みだした。
一樹は、ここに来たのだ。

寝ている時に見たであろう、暗闇の夢が無意識に脳裏をよぎる。
あの悲しい瞳をした誰か、自分の名を呼んだ誰かは、一樹だったのだ。夢だと思っていたが、そうじゃなかったってことになる。
一樹が、会いに来てくれたのだ。その事実だけで、京子の中の何かが弾けて、やがてひとつにかたまった。
残された時間は、ないに等しい。京子は、いつも逃げてばかりの自分が嫌だった。探偵に騙されて連れてこられた時、真実と向き合うとそう決心したばかりだったのに、また逃げ出そうとしていたのだ。
京子は、ネクタイピンを握り締め胸に当てた。自分が今、一番望むこと――　心は決まっていた。

第１７章　選択

退院の手続きをしてから、京子は病院から出た。手続きと言ってもお金はすでに支払われていたため、伝票をもらっただけだった。
橘から、約束の２週間までは何をするのも自由だと言われていた。
久しぶりに感じる空の下は、透明感のある冬の匂いがした。
京子は深呼吸をしてから携帯の電源をＯＮにし、都内の病院にかけた。

１時間後、京子は電話をかけた病院の待合室にいた。
午前中なので人が多い。病院というところは、いつも人があふれ、こんなにも病人がいるものかと驚かされる。
やることもないので椅子に座り、周りを見渡してみる。
大きな病院は待ち時間が多い。薬を貰うのにさえ待つ。本を読んでいる人、院内で偶然に会った友達と話している人、花を持っている人、テレビを見ている人、何もしないでボーっと立っている人、時計を気にしながら足を鳴らしている人、車椅子の人。
この人たちのほとんどは、みな生きる為に病院に来ているのだ。
自分は……、生きる為にどこに行けばいいのだろう。京子は目を瞑った。

ナース服の夏美が姿を現したのは、それから１０分ほどだ。
「京子」
「あ、急にごめんな」
京子が立ち上がり、顔の前で両手を合わせた。
「ええよ。どうしたん？」
「えっと、な。お願いがあんねん」
京子は夏美の耳元に近づくと、小声で用件を言った。
「え！　なんで？」

「何も聞かんとお願いできへんやろか？」
「そんなん、無理やわ！　ばれたらやめな、あかん」
「そうかぁ……そうやんな。夏美を首にさせるわけには、いかんな」
夏美が首を横にふり、心配そうに京子を見つめた。
「京子？　大丈夫なん？」
「大丈夫、大丈夫。ほんま、気にせんといて」
「そんなん言うたかて、気になるわ。悩み事でもあるやったら、ちゃんと相談してな？」
「おおきに……」
だが、こんな非日常のできごとを、相談できるはずもない。京子は視線をそらせた。
「えっと、ほな、またな」
「え、ちょっ、京子？」
くるりと背を向けて、逃げだすように走り出す。
「京子！！　また来週にでも飲みに行こうや……」
遠ざかる京子の耳に、夏美の声が響いた。自動ドアが開く。
「元気でな……」
自動ドアが閉まる寸前、振り向いて呟いた京子の声。夏美に届いただろうか――。

その後、京子は手当たり次第病院を駆け巡ったが、どこも相手にしてくれなかった。
諦めるわけにはいかない。どうしても手に入れたい。
最後の望みをかけ橘家を訪れることにした。

夕日に照らされた屋敷は暗闇で見るよりも大きく見えた。京子がドアホンを鳴らすと、急な訪問にもかかわらず、とくに驚く様子もなく緑子は招き入れてくれた。
京子は通されるまま、リビングのソファーに腰かけた。前に訪れた時は、リビングには入らなかったから初めてということになる。

高そうに見えたソファーは期待を裏切らず、京子の疲れた身体を深く沈ませた。目を閉じてこれからのことを考えてみる。
橘は留守。そのことにまずは安堵する。ラッキーだといってもいい。橘がいないことで、確率はぐんと上がるはずだった。

緑子が暖かい紅茶と苺のケーキを運んできた。京子はぴんと背筋を伸ばした。
「ありがとうございます」
「どうぞ。橘は、いつ帰ってくるかわからなくって、ごめんなさいね」
苦笑いをしながら、京子の真向かいに座る。
横にある大きい窓からは、柔らかな光が差し込んでいた。
紅茶にミルクと砂糖をいれ、スプーンで静かにかき混ぜた。湯気がうっすらと空気中に漂い、そして消えていく。自分の未来を象徴しているかのように見えて、息苦しくなる。

「今日は、橘に何か？」
「え？　あ、いえ」
視線を落とし、宙を見つめた。
緑子が、紅茶を口に運ぶ。
「答えは、もう出たの？」
「え？」
「ほら。どうしたらいいかって言ってたでしょ？」
「あぁ……一応。でもまだ迷ってます。とりあえず自分のしたいことを、しようと決めましたけど」
「そう。私は、京子さんの考えてる事、なんとなくわかるわ。自分もそうだったから」
京子はゴクリと喉を鳴らし、紅茶を流し込んだ。
「当ててあげましょうか？」
「え？」

「探してるんでしょ？　おそらく、薬を……ね」
一瞬、心臓が止まった気がした。その通りだったからだ。
京子は睡眠薬を探していた。夜眠れないからといえば簡単に手に入ると思っていた。だが、病院でことごとく断られた。ちゃんとした原因がないと処方してもらえないのだ。
もちろん、眠れないから睡眠薬が欲しいのではない。
裏ルートに精通している橘なら手に入ると思ったが、そんな見え透いた嘘などすぐにばれるとわかっていた。緑子だけなら騙せると思ったが、甘かったようだ。
『あの時、死ななくて良かった』
京子の脳裏に再び、あの言葉が甦る。
自分の決断が間違っているのは、わかっている。でも、こうすることしかできなかった。他に方法が見つからないのだ。
「そんなに驚かないで。私もそうだったと、言ったでしょ？」
緑子は、病院で過去の話をした時と同じ遠い目をした。
「私も、あの頃は死のうと思ってたわ。手っ取り早く薬でね。まあ、死に方はなんでも良かったんだけど。
最初に睡眠薬を飲んだわ。でも、薬の量が足りなかったのね。病院でも一度でたくさん貰えるものじゃないから、飲んでるふりして溜め込んでから試みたけど、あまり強い薬じゃなかったみたいね。夢遊病にはなったけど」
京子は淡々と話す緑子が怖くなった。昔の緑子は、今の自分と重なって見えたからだ。
「それでね、あるルートでやっと毒薬を手に入れたの。数分で楽に死ねる薬よ。結婚するはずだった日にね、飲もうとしたの。でも、その日に橘に会ったのよ。今考えれば、運命ってやつなのかもしれないわね」
言葉が出ない。京子は唇をかみしめて、泣きそうになるのを必死にこらえた。

「京子さん」
「はい？」
「あげましょうか？　その薬」
「えっ？」
「かなりの毒薬よ？」
「あっ……。貰っても、いいんですか？」
「私にはもう、必要ないから」
「でも……」
死の決断をしている自分に、緑子が協力してくれるなんて思いもしなかったので、言葉に詰まる。
数分で死ねる薬。しかも楽に。何を迷うことがあるだろう。
京子がゆっくりと頷くと、緑子はすっと立ち上がり、部屋から出ていった。

勝負の日、京子は橘家に一度行き、そこからある場所へと移動するのだそうだ。その場所で、橘か一樹が来るのを残酷にも待てというのだ。
そんなこと自分には耐えられないと、すぐに思った。自分のために誰かが死ぬなんて、考えたくなかった。
橘は自分のことを命の恩人だというけれど、流れる血液が特殊だっただけなのだ。助けたいと思ってしたことではない。
だから、その前に薬を飲んで、何もかも終わりにしたかった。

緑子が戻ってきた。
手には小さなジッパーつきのビニール袋。京子の視線はそこに集中した。赤い薬が揺られ、ひどく鮮やかに見えた。

第１８章　望み

不動産屋の前に京子は立っていた。
引き戸を開け、中に入るとすぐに、少し古びた机とパイプ椅子が置いてあった。右側の壁に沿って置かれている腰ぐらいの高さのスチール製棚には、賃貸雑誌が無造作に置かれていた。
京子は椅子に座り、白髪交じりの不動産員に話しかけた。
「すいません。あそこのマンション、空いていた部屋ありましたよね？」
近くに見える、マンションを指さす。
「あぁ、あそこね。確か、２ヶ月ぐらい前に決まっちゃったんじゃないかな」
メガネを微妙に調整しながら、椅子の下に置いてあったのだろう、分厚いクリアファイルを取り出した。
「そうなんですか？　あの４０２号室、うまっちゃったんだぁ……」
京子があからさまに落胆した声で言うと、不動産員は指でクリアファイルをなぞり、怪訝な顔をした。
「えっと……　ん？　お客さん、４０２号室じゃなくて、６１５号室だよ」
「あ、そうでしたっけ？」
「えっと、あそこの家賃ぐらいなら探せば他にも――」
「あ！　ごめんなさい。時間がないので」
「え？」
「また来ます」
「そうかい？　じゃあ、また待ってるよ」
京子はぺこりと頭を下げ、すぐそばにある引き戸に手をかけた。
「残念だったね」
後ろから声がする。
「へ？」

「マンション。気に入ってたんでしょ？」
不動産員は眼鏡を外すと、優しい表情をした。
「まぁ、人生うまくいかないこともある。でも、それも運命だ。きっと次には、必ずいいものが見つかるよ。だから、また来なさい」
そういうと、京子の暗い顔を見ながらゆっくりと微笑んだ。
京子も笑顔を作って、今度はちゃんと会釈をした。
もう、きっとこれない、と思った心を奥にしまいこみ、京子は不動産を後にした。

すでに日は沈み、寒さが身に凍みた。
さっきから飛び出しそうな心臓の音を抱えながら、一樹が、先輩の家と嘘をついていたマンションに入った。エレベータに乗ると6階を押す。
京子は、先ほど不動産で聞いた615号室を目指していた。
エレベータが到着すると、重たい足をゆっくりと進める。
果たして、一樹はいるのだろうか。
京子にとっては重く見える扉。その前で深呼吸をする。さっきから心臓は張り裂けそうだった。
願をかけるように目をぎゅっと閉じてドアホンを押す。ドアホンは、その場にそぐわない明快な音をたてただけで、他には物音一つしなかった。
もう一度押すが、やはり結果は同じだ。
いないのだろうか。
力が抜け、京子はため息をつく。一樹が部屋にいたとしても会える約束なんてないのだ。それでも京子はここまで来た。悩んで、悩んで、一日で一生のうちの半分ぐらい悩んだ。簡単には引き下がれない。
もう一度押そうと手を伸ばしたその時、コトッとわずかに物音が聞こえた。
それは、とてもとても小さく、普通ならば聞こえないような音だ

った。だけど、京子は聞き逃さなかった。それだけ神経を研ぎ澄ましていたからだ。
「一樹？」
問いかけてみる。
ドアの向こうに微かな気配を感じた。
「一樹、いるんでしょ？」
「何しにきた」
ドアの向こうから、低い声がした。
久しぶりの声に、いろんな感情がこぼれだしそうになるのをこらえる。
「忘れ物、届けに来たの」
返事はない。
京子は、一樹が病院のベッドに落としたネクタイピンを鞄から取り出す。
「一樹、そこにいるんでしょ？　今は、今だけは私を殺せないよね？　私たち普通の……恋人同士だよね？　ねぇ、中に入れてよ……」
ネクタイピンを握った手でドアを叩いた。
「おねがい……開けてよ！」
堪えていた涙がこぼれる。
だが、一樹が動く気配はなかった。

ドアをたたくのをやめると、京子は手が冷たくなっているのに気がついた。
両手に息を吹きかけ、ゆっくり目を閉じる。その場にしゃがみこみ、ドアに寄りかかった。
「一樹は、今、何を考えてるの？　私はさ、一樹の顔しか思い浮かばないんだよね。笑ってる一樹しか思い浮かばないんだよね。
一樹は私と出会ったことを後悔してたりする？　私は、よくわからなくなっちゃった。こんなこと考えるのも初めてなんだけどさっ。

なんだか、もういろんなことがありすぎて、全てが夢のように感じるよね。でも……、現実なんだよね」
京子は一呼吸おいてから、宙を見つめた。
「でもさ、それを否定したら今までの私たちもなかったことになる気がするの。それだけは絶対に嫌だって思った。
ねぇ一樹？　残された時間は後少しだよ。私後悔したくない。今の正直な気持ちを大事にしたいの。
ごちゃごちゃしたこと、ぜーんぶ取っ払ったらいいんだよ。そしたら大事なものが残るからさ」
手を擦り合わせて、ふーと息を吐く。息は白く、どこまでも遠く飛んでいく。その軌跡を視線が追っかけた。
「最後に残ったのはさ……私の場合、一樹に会いたいってことだったんだよね。すごく、すごく、会いたかった。ただそれだけが……残ったんだ」
ドアの向こうにいるはずなのに、一樹が何か答えることはなかった。

何時間が経過したのだろう。
時折、近くでドアの開け閉めや人の声がしていたが、今は何一つ物音がしなくなっていた。
京子は夜の冷たさで、震えだしていた。ネクタイピンを握っていた手もとうとう感覚がなくなっていた。

寒い。
1日中歩き回っていた体は、限界だった。それでなくとも、精神的に大きなダメージを受けたばかりだ。
京子は足を抱え、ひざに顎をのせて小さくなる。視界に入った靴の先が、白く汚れていた。
「たくさん歩いたもんな……」
靴を手で擦りながら、呟く。足先の感覚も、もうなかった。

京子は一樹と初めて旅行に行ったあの日のこと思い出してみる。
雪が綺麗で、空気がすんでて、頬が赤くて、耳が痛くて。でも二人だったから、暖かくて。
今思えば、なんであんな寒いところに行ったのかわからない。
でも真っ白な世界。
二人だけしかいない世界。手をつないで、歩いた。足跡も二人分。冷たい雪の上で寝っころがった。空が高くて、灰色で、小さな白い雪がチラチラ舞っていた。隣には一樹がいて、微笑んでて、抱き合って、キスをした。すごく寒いはずなのに、顔だけが火照ってた。
二人で笑った。使い捨てカメラで、写真を撮った。二人で寄り添って、撮ったんだ。

京子は目を閉じると、意識が遠くなるのを感じた。
そのとき、背後から金属の擦れる音も聞こえた。
幻聴？　そう思いながらも意識をなんとかもどす。
何かに押され反射的に立ち上がると、ドアが開いていた。
「凍え死ぬぞ」
「か……ずき？」
「ばかだな……お前」
一樹は目を細め、小さな声で呟く。京子は頷くことしかできなかった。
「本当に……馬鹿だよ」
一樹の手がゆっくりと伸び、京子は抱きしめられる。安心する匂いに埋もれれば、我慢していた気持ちが涙と一緒に溢れ出す。
一樹の顔はたちまちぼやけ、見えなくなったが、今はただ温もりが伝わってくるだけで十分だった。

二人は朝になるまで離れようとはしなかった。カーテンの隙間から光が漏れている。今日もいい天気のようだ。

「お腹すいたよね。なんか作ろうか？」
一樹から離れて、京子が立ち上がる。
「何もないよ」
冷蔵庫を覗こうとしていた京子に、一樹が頭をかきながらいった。
「それじゃ……。何か買ってこようか？」
「うん、頼む」
いつもの一樹の表情だった。殺し屋の一樹の姿はどこにもない。
鞄を持って外に出た。とても弱い陽射しだが目に染みた。眩しさのあまり顔を背ける。いつもと変わらない毎日が始まろうとしていた。
一樹と一緒にいれるのは、あと7日間だけだった。7日目がくる前に京子はこの世からいなくなるつもりだった。
ポケットから、袋を取り出し見つめる。緑子がくれた毒薬のカプセルだ。
これから起ころうとしている悲しいできごとをふり払うかのように、京子は袋を強く握り締め、ポケットに捻じ込んだ。
京子は、笑顔を作ってから近くのコンビニに入った。

◇

「どうなってるんだ？」
「ルールだ」
「殺し屋のルールなど知ったことか！」
「……7日後には必ず」
「当たり前だ！！　そうでなくても、一刻も早く事を進めたいというのに」
一樹は神取からの電話を切るとチッと舌打ちをした。どんなに気に食わない依頼人でも、依頼をこなすのがプロだ。
この世界では、どんな理由があろうとも、どうしてもやらなくて

はならないのだ。逃げ道などない。それに一樹の殺し屋としてのプライドが、そうさせていた。
ターゲットが京子でないなら、あのとき一撃目で確実に心臓を貫いたはずだった。
一樹は、引き金を引く一瞬、ためらったのだ。だから照準が狂った。完全にミスだ。このことを神取に知られるわけにはいかなかった。
京子との間に何か関係があると知れればすぐ、別の殺し屋に京子を殺させるはずだ。それだけは絶対に避けねばならない。

ドアホンが鳴った。
気配を消すと、拳銃を手にしドアの穴からそっと覗く。一樹にとっては身に染みた自然な行動だ。
しかしそこには、京子がニコニコしながら立っているのが見えただけだった。
一樹は、緊張を解きドアを開けた。
「おかえり」
「もう、またたくさん買い過ぎちゃったよ」
「うん、いつものことじゃん」
一樹は、京子の両手から袋を取りあげると台所へ置いた。
「これ、冷蔵庫入るのかよ……」
「わかんない。でも、一樹たくさん食べるでしょ？」
京子は冷蔵庫を開け、台所に置いた袋から次々と食品をしまっていく。
「ねェ、今日はどこ行く？　映画とか見たいのある？」
「いや」
一樹は、京子に気づかれることなく一瞬悲しい目をした。
「外に、一緒には出られねェんだ」
「そうなの？　だったら、ビデオ借りてくれれば良かったね」
京子は、がっかりすることもなく答える。

「あっそうだ。ラブオアキス、家から持ってこようか？」
「いいけど、俺、絶対寝ちゃうよ」
「寝ちゃうね」
二人は吹き出し、声をたてて笑った。

第１９章　気配

神取は、情報がどこから漏れているのか探っていた。最近辞めた社員、研究員を調べたが、怪しい人物は見当たらなかった。しかし、裏のルールだと言って勝負を挑んできた相手関係者だということは、見当がついていた。

「裏世界の掟だか何だか知らんが、命を懸ける意味が分からん」

神取はぶつぶつと文句をたれながらも、思考をめぐらせる。

最近辞めた者を調査しても何も見つからない、とすると、まだこのＪＩＮＮＯ製薬にいることになる。かなり詳しく知られているため、内部の者が怪しいのは間違いなかった。

元はと言えば血液を巡る事件は、２年前に起きたのだ。

「そうだ、２年前だ」

神取は外で控える秘書に、２年前に入社、しかも中途入社した人物のリストを持ってくるようにいった。

５分もすると、社長室のＦＡＸが音をたてた。神取はＦＡＸから紙を受け取ると、調査を開始した。

◇

風神は研究者としての仕事を終え、仮の自宅に向かっている途中だった。さっきから背後に気配を感じていたが、風神は振り向かず歩き続けた。その気配は、自宅の通りにさしかかると消えていた。

まずいかもしれない、と風神は経験上から察した。

細心の注意を払って車に乗り、橘家へ向かった。

橘家に着くと、いつものように部屋に通される。

「少し、お待ちくださいね」

緑子が、ホットコーヒーを持ってきててくれた。

「いつも、突然ですみません」
「いいえ」
にっこり笑うと、部屋を出て行く。

風神は橘が昔、名の知れた殺し屋だったことを知った。そうではないかと思っていたが、ようやく確信が持てた。
あの日、京子が橘に抱えられて戻ってきた夜に、全てを聞いたのだ。橘によると、その殺し屋はZと呼ばれているそうだ。彼の後ろを獲れるものはいない、という意味で裏の世界で呼ばれているらしい。おそらくその実力は、海外でも5本の指に入るだろうと言っていた。
確実、冷静、無感情。京子のマンション前で初めて顔を見たとき、そんな言葉が似合うように感じた。
橘に言わせると、昔の自分に似ているらしい。人であって、人でない。どこか、感情が欠落している。そんな昔の自分に似ているのだと、橘がポツリともらしたのを風神は忘れられないでいた。
今の橘からは想像もつかない、と思ったが、人の過去とは複雑でいろいろとあるということも経験から知っていた。

橘が部屋に入ってきた。立ち上がろうとする風神を手で制し、ソファーに座る。
「どうしました？」
「研究室からの帰りに後をつけられました。たぶん、情報を漏らした内部の人間を探しているのでしょう」
「そうか。予想はしていたが、ずいぶん早いな」
「ええ」
橘がソファーに寄りかかる。
「君は早々に仕事を辞めて、この家にいなさい」
風神は、耳を疑った。今仕事を辞めれば、真っ先に疑われてしまう。

「何故です？」
「神取の行動は、恐ろしく早い。明日にでも、君は殺されかねない」
風神は、ゴクリと唾を飲み込んだ。
「いや、ずっとじゃない。数日だ。１週間もすれば全てかたをつけるよ。それまでの辛抱だ。それに、君にはもう一つ他にやってもらいたいこともある」
有無を言わせない、雰囲気がそこにはあった。
「わかりました」と、そう答えるしかなかった。

第２０章　最期

気づけば、最後の夜になっていた。今まで感じたどのできごとよりも、一番早く時が経ったような気がした。
京子は一樹の肩に頭を預け、ソファーに座っていた。
一樹の手が髪に優しく触れている。二人の間に会話はない。ただ寄り添って、お互いを感じていた。でもそれが、とても悲しかった。
これで最後だといわんばかりに暗い闇が、覆いかぶさろうとしている。心がつぶれそうになる。泣きそうになる。このまま時が止まればいいのにと京子は思う。
それでも京子から、静かな沈黙を破った。
「一樹？」
「ん？」
「最後に聞いてもいい？」
「なに？」
「本当の事、言ってね」
視線を一樹に向ける勇気はなく、京子はただそこにある空間を見つめる。
「本気だった？　本気で私のこと……好きだった？」
「……」
再び沈黙が続く。
京子が沈黙に押しつぶされないように唇を強く噛んだ。
一樹が本気でも本気じゃなくても、自分の気持ちは変わらないだろう。だったら、こんな質問なんて意味がないのかもしれない。でも、京子は聞かずにはいられなかった。だって最期だ。もう二度と会えないのだ。
京子は心の中で祈る。
「今」
「え？」

「今、俺が何を言っても、嘘だと思うだろう？」
一樹の手が、京子の髪から離れた。
「でも、本気だった……」
溜まっていた涙が滑り落ちる。全てが報われた気がした。これで自分の人生、悔いはないと思った。
「ありがとう」
京子は震える小さな声で答えた。

夜中の3時、京子は台所にいた。一樹が寝たのを確かめてから、そっとベットを抜け出したのだ。
いつも、肌身離さず持ち歩いていた薬をポケットから出す。食器棚からコップを取り出し、水を注いだ。その音に一樹が起きないか心配したが、大丈夫だった。
コップを持ってリビングに行き、ソファーに置いてある鞄から写真を取り出す。あの時、割れてしまった写真たて。中身の写真が割れることはないのだけど、ガラスの破片でいくつも傷がつき、インクが擦れていた。今の京子と同じ、傷だらけだった。
その写真を愛しそうに京子は胸に当てる。そして、ゆっくり立ち上がりベッドに戻った。

一樹は、微かな寝息をたてていた。その寝顔を見ると、また涙腺が緩んだ。何度泣いても、涙は枯れることはなく溢れてきた。
もう、この顔も見ることはない。声も、温もりも、沸きあがる感情も、全て消えるのだ。
怖い。恐ろしく怖い。でも、逃げるわけにはいかない。

「一樹、ありがとね」
そっと呟いてから、水を口に含む。
さようなら……
薬を口に入れゴクリと飲み込むと、ゆっくり目を閉じた。

第21章　決闘

殺し屋は、橘が指定した場所にいた。街から数キロ離れた、何かの工場跡のようだ。あたりは静かだったが、時折り割れてしまっている窓から冷たい風が激しく吹いた。
殺し屋が、あたりを見渡す。かなり広い。邪魔になるようなものもなく、音が響いても誰も気づくことはないだろう。
「いい場所だ」

キーと錆びた音とともに、背後のドアが開いた。
「早いな」
橘が、殺し屋の姿を認めると呟いた。
「そっちもな」
「一つ、断りがあるんだが」
「何だ？」
「京子さんと連絡が取れなくてな、指定の場所にいないんだが……」
「ああ、家で寝ている」
「君は……。やはりそうか」
橘は、顔をしかめた。
初めて対面したときに感じた、微かな違和感。そして、京子の目から読み取れる感情を見ればわかっていた。わかっていたが、聞くのが怖かった。
「もう、関係ない」
橘の思惑を見越したかのように殺し屋が言った。
「そうか」
「それより、何か薬を飲んだようだが」
「薬？」
橘が眉をひそめて、聞く。
「おそらく強めの睡眠薬かなんかだろう。それより鍵、渡しておく」

殺し屋が放り投げた。
そのマンションの鍵は、橘の足元まで滑っていく。
「ここに、京子さんがいるんだな」
首を縦に振り、無言で答える。
「わかった」
橘は鍵を拾うと、すぐそばにある積み重なった鉄筋の上にそっと置いた。
「勝ったものが、この鍵を持っていくことにしよう」
「そうだな」
二人の視線が、その鍵に注がれた。

「君は、Zというそうだな」
「その名は、好きじゃない」
「裏の世界で名をもらえるのは、腕がいい証拠だ」
「興味など、ない」
殺し屋は、フウッとため息をつく。
「おい、おっさん。ここに、だべりに来たのか？」
「いや」
「なら、そろそろ始めようぜ」
殺し屋は、懐にある拳銃に手を伸ばそうとした。
「君は、それでいいのか？」
その手が、銃に触れたまま止まる。
「何が言いたい」
「君は、恋人が殺されてもいいのか？」
殺し屋があきれたように笑った。
「仕事にプライベートは持ち込まない主義なんだ。それに、何が言いたいか知らないが、俺が死んでも、次の殺し屋が来るだけで何も変わらないさ」
「そうかな？」
「そうだろ？」

かつての殺し屋の血か、橘は冷たい目で殺し屋を捕らえた。
「もし、私が勝ったらそうはさせない。必ず、根っこから潰すがな？」
「好きにしてくれ」
殺し屋が威嚇に動じることなく手をふり上げると、橘は満足そうにニヤリと笑った。
「いいだろう。始めよう」

第２２章　お願い

雪なのか、それとも雲なのか？　体がフワフワ浮いている。
誰？　どこからか、声が聞こえる。
とても優しい懐かしい声だった。
声の主は、そっと頬に触れる。
なんでそんなに、悲しい目をしてるのだろう。
なにか言っているのに、聞こえない。もどかしい。
呼んでいるの？
待って。そっちには、何があるの？
いかないで。置いて、いかないで。
お願い、いっしょにそちらに連れてって――。

手を伸ばすと、そこに確かな感触があった。
ゆっくりと目を開ければ、どこかで見た白い天井がある。
ここは、どこだっけ？　ボーっとする頭を、フル回転させる。
そうだ、薬を飲んで……
京子はさっきから感じていた温もりをたどる。と、手を握っている緑子が見えた。
「あ、れ？　緑子……さん？」
「京子さんっ！」
「え？」
「あぁ……ごめんなさい、私、私……」
緑子の瞳に、涙が浮かぶ。
「京子さんに渡した薬、あれね……ただの睡眠薬なの」
京子は勢いよく起き上がる。
「じゃあ、一樹は？　橘さんは？」
緑子の顔が、一瞬にして悲痛な表情に変わる。
「そんな！」

京子は一樹と橘を戦わせたくなかった。だから、薬を飲んだのだ。なぜ、こんな結果になってしまったのか。
「緑子さん、どうして？」
今にも溢れてくる感情を抑えようとしたが間に合わない。
「ひどい……、酷いよ！」
握られていた手をふり切り、細い肩にくってかかる。緑子さんの涙が見えたが、京子は攻撃の手を緩めることができない。相手を思う余裕など、どこにも無い。
「ごめん……な……さい」
「なんで、なんでなのよ！！」
「あなたを死なせたくなかった」
緑子の気持ちが突き刺さる。だが、今の京子にとってそれは残酷な宣言でしかない。
しかし、緑子は食い下がる。頼りない腕が力強く京子を引き離し、流れっぱなしの涙が場違いであるかのような強い視線を向けてくる。
「どうしても、あなたを死なせたくなかった！」
「勝手なことを言わな――」
その時、緑子の震える小さな肩に大きな手が慰めるように置かれた。言葉途切れたままに、視線を上に向ける。京子の目は呼吸を止め、その姿に釘づけになる。

橘だ。

ここに橘がいるという事実は、もう1つの決定的な事実を語っている。
体が急に震えだした。寒さなんか感じるはずも無いのに、両腕をかかえるようにして、その震えを止めようとする。
「か……ずき？」
目を開けているのに、暗闇しか見えない。

考えたくなくて、頭を抱え込み泣き叫んだ。泣き叫びながら、幽霊のようにベッドから這い出て橘へ向かう。
胸ぐらをつかんで、力強く引っ張った。
「どうして、どうしてなのよ！」
何かが体を支配する。抑えの効かない怒りを、橘にぶつけた。
「殺して、私を殺して。お願い！」
悲しい声が、主をなくした部屋に響き渡る。
「殺して、殺してよ！　死なせてー」
「京子さん！　京子さん！」
白く細い腕が背後から覆いかぶさってくる。京子は体をひねり、ふり払った。
「もう、放っておいて！　お願いだから、死にたいのよ……ねぇ、お願いだから死なせて！！」
ずっと無言で、京子の攻撃を受け続けてきた橘が動いた。コートのポケットに手を突っ込むと、何かを取出し京子の前にさしだした。
京子の視線が注がれると、その手がゆっくりと開く。
ネクタイピンだ。橘の手の中で血が付着しているそれは、持ち主の存在を完全にかき消した。
「これを、君に持っていて欲しいそうだ」
それが、橘が聞いた一樹の最期の言葉だったに違いない。
京子は、心臓を撃ち抜かれた気分だった。
心にある悲しみはさらに濃く染まり、意識が薄れていくのを感じた。
京子は抗うことなく、暗闇にその身を落とした。

◇

緑子が、泣き崩れ、その横で橘の右手が気を失った京子を支えていた。
左手は、だらんと垂れ下がってピクリとも動かない。左肩のあた

りが、黒く染まっていた。一樹が撃った弾が、貫通していたのだ。
致命傷には至らなかったが、かなりの出血だ。応急処置程度の止血をしているにもかかわらず、血が滲んできていた。
そんな状況のまま、橘は京子の元へ来たのだ。
恨まれようとも、叩かれようとも、遠くなる意識をギリギリのところで保って、ここに来たのだ。それが、礼儀であると思ったからだ。
京子を見る橘の視線が、悲しく揺らいだ。
主の痕跡がまだ残るマンションの中で、緑子の泣く声だけが響いていた。

◇

風神は、ＪＩＮＮＯ製薬の研究所にいた。
真夜中の研究所は、不気味だった。病院にも似た長い廊下はひっそりと静まり返り、暗い蛍光灯が不快さをさらに増長させていた。
いつもは、夜中を過ぎても明かりがついているが、幸い今日は誰もいないようだ。
風神は橘から報告を受け、癌細胞死滅に関する全データを抹消するべくこの場所にいたのだ。誰もいないといっても、ゆっくりなどしていられない。
風神は、あらかじめガソリンを撒いておいた保管庫に火を放つ。
資料、血液サンプル、培養された血液、この研究における全ての証拠は気持ちがいいほど良く燃えた。紅黒い炎が残らず燃やしつくす頃、かなり遅れて火災報知機が稼働する。もちろんそれも、風神が仕掛けた。
もう、ここに用はない。
風神は、研究室をあとにした。
研究所の一室で寝ていた赤月零児は、けたたましく鳴り響くベル

に飛び起きた。
急いで部屋を出ると、焦げ臭さに怪訝な顔をする。ふと窓を見ると、隣の棟の2階から黒煙が立ち上っていた。研究資料が置いてある保管庫がある部屋だ。真っ赤に燃えた炎がチロチロと見えた。
「なんてことだ!!」
自分がいる棟ともつながっているため、とりあえず零児は逃げ出す。
だが、疑問が残る。
火の回りが速すぎるのだ。零児は、逃げながらにして頭で計算する。
火の状態と、煙の位置、火災報知機の遅れ、誰かが故意にしたとしか考えられなかった。
零児の顔は、怒りで震えた。
今までのデータなら、全て頭の中にある。だが、血液がない。これが無ければ、研究内容など無意味だった。
「許さない。絶対許さない。俺の努力を、研究をよくも……犯人を、必ず探してやる!」
零児は、もう間に合わないであろうサイレンの音を聴きながら、復讐を誓った。

第２３章　無に返る

翌日、ＪＩＮＮＯ製薬の神取は頭を抱えていた。
Ｚは殺し屋の勝負で負け、研究所は半焼した。何もかも、ふり出しに戻ってしまったのだ。
警察には火の不始末という形で処理した。極秘で進めてた研究が公になることは、どうしても避けねばならなかった。
研究データは零児が記憶しているだろうから、高科京子の生存は、こうなると不幸中の幸いだったかもしれない。
だが唯一の研究を知っている零児も姿をくらまし、その助手の佐藤勉も同じく姿を消した。
零児は、研究以外に興味が無い。となると、当然、犯人は佐藤勉だ。どちらにしても新しい殺し屋を探さねばならない。

「無理だな」
「断る」
「悪いが、力になれない」
「そりゃ、相手が悪いな」
「あきらめな」
「命がいくつあっても足りねぇよ」
「さっさと、手を引きな」

闇ルートに精通する輩に依頼するものの、返ってくる言葉はどれも同じだった。挙句の果てに「お前死ぬぞ」とも言われた。
裏世界で、Ｚの死んだ情報が飛び交っているのだろう。いくら金を積んでも、命が危険な仕事はやらないということなのだ。殺し屋の癖に、死ぬのは怖いというわけだ。
「使えん、屑どもが！」
神取は、吐き捨てた。

こうなれば海外の殺し屋を手配するしかない。金は倍かかるが、やむを得ないだろう。裏取引に使用する足のつかない携帯を手にした時だった。社長室の直通電話が鳴り響いた。
誰だこんなときにと、舌打ちをし無言で電話に出る。
「殺し屋はみつかったか？」
低い声が聞こえてきた。
神取は、眉をひそめる。
「新しい殺し屋だよ。みつかったのか？」
「貴様、誰だ？」
「名乗る義理もない」
「なんだと？」
「この件から、一際手を退け。そうしなければ、今ここで消す」
「何のことだ？」
「とぼけても無駄だ」
Ｚを殺ったのは、この男か……？　先ほどの『お前死ぬぞ』という声を思い出し、神取の背中に汗が伝った。
「誰だ、お前は！」
「手を退くのか、退かないのか」
「意味がわからない」
「それが、答えか？」
神取は考えた。
この男、ここで殺すといっているが、どうやって殺そうというのだ。セキュリティーはどこの会社よりも厳重にしてあるし、ＪＩＮＯ製薬の広大な敷地にはこのビル以外に高い建物は無い。いくら裏の世界で恐れられているとしても、今この男の言っていることは間違いなくハッタリだ。
神取は、余裕を取り戻したのか不敵な笑みを浮かべた。
「そうだ、と言ったら？」
手に持っていた携帯が粉々に弾け飛んだ。
神取は口をパクパクさせ、ゆっくり窓の方を見ると顔を歪ませた。

弾が通過した跡が、くっきり残っていたのだ。
神取は、人生で初めて命の危険を察知した。それは想像していたものより恐ろしく寒気を伴うものだった。手から滲み出る汗で受話器を滑り落としそうになる。
「次は、ない」
底が見えない暗闇から、死神の声が聞こえた。
「わっ、わかった。この件に関して、一際手を引く。二度と関わらない」
「利口な選択だ。嘘なら……わかってるな？」
「嘘じゃない、だから命だけは……」
電話は、ブツリと切れた。

神取は、その場にしゃがみこむ。生きてる心地がしなかった。
一体どこから撃ってきたのだろう。しかも正確に、携帯を狙ってきたのだ。砕け散った携帯を見ると、再び寒気がした。
いつだって、自分は一番安全なところにいたはずだ。自分が命を狙われるなんて、思ってもいなかった。
どうやら、この件からは手を退くしかなさそうだ。命がなければ、金なんて屑だ。
神取は、窓からＪＩＮＮＯ製薬の敷地を見下ろした。莫大な資金を投じて、２年の月日を費やしたが、全て無に返ったのだ。
血がにじむほど強く手を握り締めたあと、神取はガクリと肩を落とした。

第２４章　無色

一樹のいない生活が始まった。それは見事に色あせて、悲しみだけが広がった世界だった。
一緒に過ごした時間は、たった2年だ。短くあっという間だったが、色んな場所に想いは残る。
そしてそれらは、ことごとく日常に散りばめられていた。
楽しかった思い出は苦しいだけだった。忘れることもできず、もがき苦しむ毎日。逃げ場もなく息をするのも躊躇われた。
涙は3日で枯れた。もう泣くこともない。
これからは毎日をただ、消化していくだけだ。
京子の瞳は何もかもが無色にみえた。

◇

２００３年　夏

風神は、別の仕事で動いていた。

橘の依頼が終了して、1年半以上がたとうとしていた。風神にとってあの仕事は、大きな経験となった。もちろん報酬も桁が違っていた。
依頼終了日、橘家で高科京子を見かけた。2週間ぶりだったが、見てわかるぐらいに痩せてしまっていた。その理由は橘に聞いて、知っている。
自分で望まない血液を持ち組織に狙われただけでも気の毒だと思っていたのに、恋人が殺し屋でまさか命を狙われるなんて、彼女の悲しみは計り知れない。かける言葉もみつからなかった。
あれから、ＪＩＮＮＯ製薬の悪い噂は聞かない。本当に、あの件

から一際手を退いたようだ。
製薬業界で『鷹の目』と呼ばれ恐れられている男を、橘は如何にしておとなしくさせてしまったのか、風神には想像もできなかった。
さらに橘は、元殺し屋とはいえ裏世界で指5本以内に入る現役に勝ったのだ。そんな男と仕事したことを、怖くもあり、自慢にも思う。何より、実力につながった。今は、探偵事務所に所属しているが、いずれ独立するつもりだった。

風神は仕事を終え、車で自宅に帰る途中だった。
さっきから、後ろに見え隠れする車が気になっていた。つけられてるとは思わなかったが、次の角でハンドルを思いっきりきる。
わき道に入ると、バックミラーを見た。
風神は、眉をひそめる。

つけられてる。何故？
今抱えてる仕事は、そんな危険なものではない。
では、違う件か？
仕事によっては、風神のターゲットが他の探偵を雇い、逆に見張られる場合がある。しかし、それにしては明らかに素人じみている。尾行の基本がなっていなかった。
幸いこの辺は混雑する道ではなかったし、空いている時間帯のためか車は殆んど見当たらない。
風神は、素人の尾行をふり切ろうとスピードを上げた。後ろの車も、スピードを上げてくる。風神は、さらにアクセルを踏みこむと鮮やかにハンドルをきった。何度か乱暴に角を曲がる。バックミラーを確認すると、景色だけが流れていた。
巻けたと思いスピードを緩める。周りに気配を向けると、海が見えた。同時にいくつもの重機が目に入る。どうやらここは開発途中の埋立地のようだ。巻くのに必死で、立ち入り禁止区域に入っていたことに気付かなかった。

風神は、突きあたりまで来るとエンジンを止めた。目の前はすぐ海だ。その海と対面する形で、いくつもの倉庫が建っていた。時折、船の汽笛が聞こえる。

車を降りて、伸びをする。一服しようとタバコを取り出しながら少し歩くと、遠くからエンジン音が聞こえてきた。振り向くと同時に、巻いたはずの車が急ブレーキ音をたてて斜めに滑りこんできた。

風神が身をよけながらも乗っている相手を確認する。目を大きく見開き、咥えていたタバコを落とした。

その男は、忘れもしない赤月零児だった。

車を降り、近づいてくる。その手には、拳銃が握られていた。

風神はすぐに車に戻ろうとしたが、離れすぎていたため間に合わない。零児を背にし、全力で走り出した。

なぜ今さら、赤月が？　ＪＩＮＮＯ製薬の件は、片付いたはずだ。神取？　いや、橘が噛んでいるから、それはありえない。では、個人で動いているのか？

風神の頭が急速回転する。

後ろで発砲音が聞こえた。驚いて振り向くと、車のタイヤに拳銃を向けている零児がいた。

「くそっ！」

まだ、ローンが残ってやがるのに……！　と舌打ちをする。とにかく、逃げ道は断たれたのだ。

風神は、足には自信があった。この職業は足が命だ。探偵業のベテラン位置にいる風神は、十分に鍛えられていた。だが、この場所の土地勘がない。

「逃げ切れんのかよ？」

風神は、自分に問いかけた。

零児は、ようやく見つけた風神を逃すものかと必死に追いかけた。

そう。彼の名前は、佐藤勉なんかじゃなく、風神涼だ。

何もあてがなかった零児は、この一年半をかけ、ようやくたどり

ついたのだ。自分の命を懸けて注いできた研究を、一瞬にして灰にした憎き相手を。

必ず殺してやる！　と零児は、拳銃を握り締めた。

風神は走り続けていた。しかし、同じような倉庫がたくさん並んでいるため、どこを走っているのか分からない。さらに、あたりは暗くなり始めていた。

今のところ零児の姿は見えない。しかし、零児のしつこさはよく知っていた。

研究所で一緒に働いていたからよく分かる。零児は、失敗しても何度も、何度も、根気よく研究を続けていた。しかも集中力は何時間だって続く。研究以外、何もいらないかのように没頭していた。もうそれは、常軌を逸していた。

目的、つまり、自分を殺すまであきらめないだろう。しかし、何故ばれたのか。あの時、研究所には誰もいないと思い込み、確認はしなかった。研究は一段落していたから、さすがの零児も帰っただろうと思っていたのだ。いくら急いでたとはいえ、致命的なミスだ。

風神に、後悔の波が押し寄せていた。

零児の目が、獲物を捕らえる獣のように光った。

頭には、風神の仕事も、その環境も、人間関係までもが頭にインプットしてある。ある程度の行動は予測できた。

零児は、すでに知り尽くしている道と、風神の行動パターンを計算した。そして、はじきだした答えどうりに、風神をジリジリ追い詰めていった。

風神は、さすがに走りつかれ歩き始めていた。どこを見ても零児の姿は見えなかった。

吐く息を整えながら後方を見ると、倉庫の影が揺れた気がした。嫌な予感がする。

風神が固まった。
暗闇にまぎれ、零児が姿を現したのだ。
風神は、また走りだす。
右、左、左、右。角を曲がるが、似たような風景からか、同じような場所をぐるぐる回っている気がする。もはや、冷静でいられなくなっていた。
そんな風神を、零児はいとも簡単に行き止まりに追い込んだ。
「しまった」
風神の目の前は、壁だった。
じりじりと、零児は近づいてくる。
風神の顔に絶望の色が浮かんだ。

「久しぶりだな、佐藤勉。いや、風神涼」
「よく調べたな。もう二度と会わないと思っていたのにな……」
「よくも、俺の研究を台無しにしてくれたな？」
「あれは、仕方が無かったんだ」
「黙れ！」
「神取は、お前に血液を培養させたあと、俺たち全員を殺すつもりだった」
零児の眉がピックと動いたのを、風神は見逃さなかった。
「本当だ。今はないが、証拠もある」
「うそだ」
零児は、かすかに動揺し始めた。

零児にとって、神取は絶対的な存在だった。
自分を研究者として認め、研究に没頭させる環境を与えてくれた。これ以上ない、恩恵を与えてくれた人物なのだ。しかも自分は、少なからず神取の役に立っていると思っていた。自分を必要とし、信頼されていると思っていた。だから、殺そうとしているなんて考えられなかった。

「嘘じゃない」
「うそだ。信じないぞ」
零児が、銃を構える。
くそ、ダメか……。覚悟を決めた風神は、壁を背にして目を瞑った。
しかし次に聞こえたのは銃声ではなく、何かが倒れる鈍い音だった。
目を開けると、零児は倒れていた。
零児の側には黒い男がいた。その男は、零児の手からはなれた銃を拾い上げると、ニヤリと笑い風神を見た。
風神は、言葉を失った。
そこには、いるはずもない殺し屋がいたからだ。

第２５章　それから

照りつける日差しが徐々に強くなってくる昼頃、風神は電車に揺られていた。零児に車をやられてからずっとだった。経費削減とか何とかでタクシーは使えない。

「面倒だな」

小さく呟く。

天気予報で昨日から梅雨入りと言っていたが、今日は晴れている。肌にまとわりつく湿気は、日を追うごとに不快さを増してきていた。

風神は、その蒸し暑さにイライラしながら頭を悩ませていた。

言うべきか、言わないべきか。

零児に殺されると思ったのは三日前だ。その時、思わぬ人物に会ったのだ。

風神が息をのむほど驚いた人物は、死んだと聞かされていたはずの殺し屋だった。

絶句していた風神が我に返り、確認しようと口を開きかけた。

「言うな。その名は、気に入らない」

男は、風神よりも数秒早く言葉を発した。

ゴクリと唾を飲む。

「死んだと思っていたが？」

「同感だね」

クッと笑ったあと、殺し屋は零児の銃をいじりだした。見事な手さばきで、銃が分解されていく。

「どうして、助けた？」

「ん？　ただの気まぐれ」

やがて銃がばらばらになり、男の足元に部品が散らばった。そして、銃の要である部品だけを手に取り、ポケットに仕舞いこんだ。

「じゃあな」
風神は、その場を去ろうとする男に問いかけた。
「お前、いいのか？」
「何が？」
背を向けたまま男が聞く。
「何って……。いや、いい」
「ひとつ、忠告しておいてやる」
「は？」
「日本を離れたほうがいい。アンタの腕なら海外でも通用するだろ？」
そう言うと、静かな気配を残しながら暗闇に消えた。
呆気にとられていた風神は、ハッとして零児に近寄った。
どうやら、気を失っているだけのようだ。
海からの生暖かい風が、風神の頬を撫でた。
気まぐれとはいえ、敵だと思っていた殺し屋が助けた。しかも、ご丁寧に忠告までしていった。
確かに、零児がこのままあきらめるとも思わない。日本にいては、危険なことはわかる。海外に出るのもいいかもしれない。
そんなことより、高科京子はこのことを知っているのか？
風神は、複雑な心境のままその場を離れたのだ。

あれから3日間風神は、ずっと悩んでいる。
そもそも、橘はZが生きていることを知っていたはずだ。Zを撃った張本人なのだから。だとしたら、何故このことを彼女に話さないのか？
Zは何故、彼女に会いに行かないのか？
記憶を失っている？　とも考えたが、撃たれたことを覚えていたからそれはあり得ない。
敢えて、避けているのか？　だとしたら、何も言う権利はない。

言うべきか、言わないべきか。

風神は、黙っていることに決めた。

◇

一樹がいなくなって3回目の春がきた。

彼がいない事実にすっかりなれ、何事も無く過ごせるようになった。それは、楽になったという意味ではなく、一樹がいない生活を何も感じることなく過ごせるようになったということだ。

心の痛みも、悲しみも、楽しみも、何も感じない。生きている実感もない。

京子は、それでも生きていかなければならなかった。

朝、いつもと同じようにテレビをつけると、丁度良く天気予報がやっていた。新人アナウンサーが、笑顔で各地の天気を伝えている。今日は、比較的暖かいようだ。この時期、気温によって着ていくものを左右されるので、毎日チェックする。確認を終えた京子が、テレビを消そうとリモコンに手を伸ばしたときだった。

テレビからププと軽快な音がし、速報の大きな文字とともに男のアナウンサーが姿を現した。つい手が止まる。

ＪＩＮＮＯ製薬会社で殺人未遂

男のアナウンサーは、番組が変更になったことを説明し、事件の詳細を語りだした。

「ＪＩＮＮＯ製薬元研究員赤月零児（３８）が、同会社社長、神取進（５９）殺人未遂容疑で指名手配されました。警察は――」

京子は音声を大にして、ソファーから身を乗り出した。

最終章　雪

２００５年　２月

風神は、橘、緑子とともに空港にいた。独特の雰囲気のなか、いろんな人種が行き交わる場所だ。風神は、大きなトランクとボストンバックを手に、チェックインフロアーのソファーに腰かけた。

「まさか、風神さんが、アメリカへ行くなんてね」

隣に座る緑子が、声をかける。

「ええ、本当はもっと早く行こうと思ってたんですけどね」

風神は、苦笑いした。

事務所の仕事の都合で、遅くなってしまったのだ。

「まだ、少し時間があるわね。何か飲み物買ってくるわ」

後ろにある大きな時計を見てそういうと、緑子は席を立つ。彼女が座っていた右隣に橘はいた。視線は緑子の後姿を追ったまま、ゆっくり口を開く。

「いい選択をしたな？」

「ありがとうございます」

「君なら、海外でも十分にやっていける」

「同じこと、いうんですね」

「同じ？」

橘が怪訝そうに視線を横に向けると、風神と視線が重なった。

「Ｚです」

橘の表情が一瞬変わったが、すぐに穏やかな顔に戻る。

「そうか。会ったのか」

「殺してなかったんですね？」

風神が聞いても、橘は視線を元に戻しただけで何も答えなかった。

「緑子さんはこのことを？」

橘は、首をゆっくり横に振る。

緑子が袋を持って、こちらに戻ってくるのが見えた。
「緑子にいえば、京子さんにバレてしまうだろうからね」
「ダメなんですか？」
「それは、一樹君が決めることだ」
橘は、もうZとは、いわなかった。

緑子が戻ってきた。白いビニール袋からホットウーロン茶を1つずつ配ると、先ほどとは違う雰囲気の二人を不思議そうに見つめた。
「何を話してたの？」
「なにも」
橘が答える。
「本当かしら？」
緑子はいたずらっぽい目で、今度は風神を覗き込んだ。
「これ、いただきます」
風神は、笑みを返しながらウーロン茶をゴクリと飲んだ。

◇

あの事件のあと、ＪＩＮＮＯ製薬は業界トップから引きずり下ろされた。
零児は、風神にいわれたことがずっと頭に引っかかっていたのだ。執念で調べてみると、神取のあくどい人格が浮かび上がってきた。
零児は自分以外に対して、神取がどんなに手を汚そうと興味はなかったが、自分をも切り捨てようとしていたことが許せなかった。裏切られた気がした。
憧れ、尊敬していた反動で、怒りの矛先は風神から神取に移った。
秘書に顔を知られていた零児は、あっさり社長室までたどりついた。神取も別段驚くこともなく、目だけを零児に向けた。
「なんだ？」
「お久しぶりですね。社長」

その鋭い目に臆することなく、答える。
神取の『鷹の目』は、もう零児には効かなかった。
「今までどこにいた？」
「ええ。おかげで転々としておりました」
神取にとって、零児はもう不必要な人間だった。口封じに殺すことも考えねばならない相手だ。
「俺に、何の用だ？」
「ええ、すぐに済みますよ」
零児は新しく手に入れた拳銃を構え、今でも自分を見下す神取に、何のためらいもなく引き金を弾いた。瞬時のできごとに、神取はなすすべもなくその場に倒れた。
発砲の音を聞いて秘書が駆けつけてきた。秘書が見たものは、倒れて動かない神取に拳銃を向けている零児の笑った顔だった。叫び声が上がる。零児は、うるさく喚く秘書に向かって撃った。だが、少し距離があるためか、弾は当たらない。
零児は、顔面蒼白の秘書を押しのけ逃げた。

致命傷には至らなかった神取は、救急車で近くの病院に運ばれた。駆けつけた警察が秘書に事情を聞くと、すぐに零児を指名手配した。
元々、何の計画もなしに怒りのまま神取を殺そうとしていた零児はすぐに捕まった。近くの公園ベンチで、震えながら拳銃を抱え、ブツブツと何か唱えていたそうだ。それは研究内容のデータだったに違いない。
警察の介入を余儀なくされたＪＩＮＮＯ製薬は、今までの悪事が芋づる式にメディアで放送されることとなった。
神取は、社長の座はおろか、数々の違法行為の主犯として逮捕されることとなった。

◇

「じゃあ、そろそろ行きますね」
空港の出発ロビー案内の放送を聞き、風神がいった。
「頑張りなさい」
「体に気をつけてね」
風神はゆっくりと頭を下げ、二人を背にして歩きだした。
受付を済ませ、搭乗口付近の大きな窓に視線を向ける。一機の飛行機が、厚い雲に覆われた灰色の空に向かって離陸していった。
風神は目を細める。
今にも雪が降り出しそうだった。

◇

朝から霜が降りるほどの寒さで、日中も気温は上がらない。家の中にいてもすることはなく、こんな寒い日はどうしたって思い出す。京子は、外に出ることで紛らわそうとした。

もう3年だ。
時間は、京子の胸に一樹を残したままあっという間に過ぎていく。
時がたてば傷もいえる。よく耳にする言葉だけど、傷が癒える分、悲しいほどに思い出だけになっていく。写真も見てないから、今では顔も朧げだ。

闇の中にのめり込みそうになる思考回路を慌てて引き戻すと、冷たい風の中を再び歩き始めた。少しでも気が晴れるようにと履いたお気に入りのブーツとコート。その効力はいまいちだ。
気がつけば、見知らぬ道を歩いていた。
両側に見えるのは銀杏の木だろう。随分前に散ってしまった葉が、乾いた音をたてている。
ここは、どこだろう。なんだか寒さが増してきたような気がするし、迷う前に戻らないと。

そう思うのに、足が逆を向いてくれない。
いっそうこのまま、行ってしまおうか。一樹との思い出がない見知らぬ場所へ。忘れたい。忘れたくない。忘れられない。
切なさに胸が締めつけられる。
いつだって頭の回路は、何度も同じことを繰り返す。誰かが答えてくれたことなんて、一度もないのに。
ハーと白い溜息をつき、すっかり冷え切った手をポケットにしまう。
銀杏の並木道は、まだずっと先まで続いていた。
行くあてなどない未来が、ずっと続くかのようで悲しくなった。
だが京子は、歩みを止めなかった。並木道が途切れたその先に何があるの、知りたかったからかもしれない。

寒いわけ……ね。

京子は、しばらく立ち止まる。
雪が降り出し始めていた。ふわり、ふわりと、白く染めていく。
また思い出しそうになって、京子はふり切るように歩きだす。
だが、キラキラ輝く雪があまりに綺麗で、一樹と心が通じたあの雪の日に重なってみえた。悲しみが襲うたび、冷たい風が京子の顔を撫で、現実へと引き戻す。いくら歩みを進めても思考は逆戻りで、外に出たことを少し後悔した。
意識を前に向けると、視界の端に黒い影が飛び込んできた。
そういえば、この道を歩いてから人とすれ違っていない。雪が降る寒い日に、出歩く人は少ないのだろう。さらに、大通りからは外れているような道だ。
京子は、特に深く考えず視線を走らせる。
心臓がドクンと跳ねた。
似てる。そう思った。
まだ遠くにいるその人は、徐々に近づいてくる。

京子の目は、一点に集中した。いや、目だけでなく体中の細胞が追う。心臓は、急に鼓動を早めた。
わかってる。ありえないことぐらい。
だけども近づくたびに、涙が出そうになった。
嘘だ、違う。
冷静なもう一人の自分が否定する。
下を向いているので、顔は見えない。
いつの間にか、京子の足は止まってしまっていた。
どうしよう。何がどうしよう？
一樹だったら？　一樹じゃなかったら？
京子は震える手で唇に触れた。もうすれ違うまで数秒なのに、確認するのが怖くて視界を閉ざしてうつむいた。
足音は歩を緩めることなく次第に大きくなり、ついに京子の真横に到達する。
京子は祈るような気持ちで目を開け、横を振り向く。
雪のはじける音が聞こえ、息が止まった。
他人の空似なんて、有り得ない。見間違うわけがない。

いろんな感情と一緒に、京子は再び呼吸を始める。
ゆっくりとふり返る。
一樹は、背を向けたまま歩いていた。
声をかけたいのに、声が出ない。
もし、違ったら？　まだそんな事を考える。3年も死んだと思っていたのだから無理もない。
夢じゃなきゃ、幻かも知れない。声をかけたら、消えてしまうかもしれない。
そんな事を考えてると、涙が滲んだ。
結局、京子は、固まったまま動けないでいた。遠のいていく背中を、泣きながら見つめることしかできなかった。

涙はまだまだ止まらない。一樹の背中が滲んで霞んで見えなくなると、必死で目を擦る。擦るたびに、距離は広がっていく。

待って、と一言発すれば、歩みは止まるのだろうか？　苦しくて怖くて、悲しくて切なくて、信じられなくて信じたくて……。いろんな感情に押され、やはり声は出なかった。

心の中で叫びながら、泣き崩れるしかなかった。

「ばかだな……お前」

そう、頭上で聞こえたのは数秒後のこと。

エピローグ

数秒前――

一樹は、その場にしゃがみこんで泣きじゃくる京子に走りよった。

「ばかだな……お前」

京子は目を腫らしたまま顔を上げた。涙も鼻水もごちゃ混ぜで、どうやら、泣くだけで精一杯のようだ。

一樹は目を細く歪ませると、京子を引き寄せ抱きしめた。

鼻を掠める懐かしい香りに、一樹は目を瞑り思いをめぐらせる。

会うつもりなどなかった。会う権利も、会わせる顔もなかった。

自分は死んだ人間であり、殺そうとした人間だ。時が傷を癒し、薄れ、別の男と一緒になって幸せになっていると、そう思っていた。いや、そう思いたかった。

3年ぶりに会う彼女が想像している姿と違っていたとして、だからといって自分になんの権利があるだろうか？

この道を歩いていたのだって、偶然にすぎず、そのまま通り過ぎようと思っていたのだ。だが、背中に感じた京子の必死の想いが、どうしても引っかかった。

幸せではないのか？　忘れてはいないのか？

痩せてしまった体に、どんな苦しみがあったのだろう？　何にせよ俺のせいに違いない。

忘れた日などなかった。

忘れることなど、できなかった。

許されることなら……と何度も思った。

走りだせずには、いられなかった。

「ばかは、俺だな」

冷たくなってきている京子の身体を、自分にめり込ませるぐらい強く抱きしめた。
京子の流す涙はとめどなく溢れ、肩を濡らしていた。
雪が、周りをうっすら白に染めるその時までに、果たして泣きやんでくれるだろうか？
泣きやんだら、何を言えばいい？
そんな事を考えながら空を見上げ、込み上げてくる想いと一緒に、より強く京子を抱きしめた。

聞こえるのは、泣き声と降り積もる雪の音。
雪は二人の間を埋めようと、あの時のように祝福し、静かに優しく降り注いでいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1711d/

雪の跡

2011年5月31日14時57分発行